
I don ' t forget you

折原奈津子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I don't forget you

【Nコード】

N0403N

【作者名】

折原奈津子

【あらすじ】

幼くして出会った、真剣な想い。

長い時間を一緒に過ごして来たのに・・・ずっと一緒にいられると思ってたのに・・・。

どこにいても、何年たっても、誰と一緒にいても、あたしの中から消えない想いがある。

一部、暴力的なシーンや性表現があります。

性表現ページは、飛ばしていただいても話はつながるようにしています。

衝撃と喪失

『・・・・・・・・何これ・・・・・・・・何の冗談・・・・・・・・？』

その日の朝早くに、実家に届いた1枚のFAX。

それがあたしの部屋に、母からの電話と共に転送されてきた。

今日は4月の10日で、エイプリルフルは当に過ぎている。

体中が震え、目の前が一瞬にして暗くなる。

何かを支えにしなければ、自力で立つことも出来ないくらいだった。

左手に握り締められていた用紙が、重力に導かれるかのようにフロ
ーリングの床に落ちていく。

何も考えられなかった。

床に落ちたFAXに書かれていたのは、18日に行われるという葬
儀の知らせ。

『・・・・・・・・どうして・・・・・・・・』

あたしにとってすべてだったものが、跡形もなく崩れていく音が聞こえた。

涙は溢れてくるのに、泣き叫ぶことが出来なかった。

心と体は・・・・・・・・・・声にならない悲鳴をあげているというのに・・・・・・・・。

『きっと何かの間違いだね・・・・・・・・』

でも元々の送信元は、その内容が嘘ではないのを物語っている。

『・・・・・・・・・・櫂・・・・・・・・!!』

このまま・・・・・・・・あたしの心臓が止まってしまえばいいのに・・・・・・・・。

そう願わずにはいらなかった。

初恋

初恋は小2の時。

自宅と学校の間くらいにあるお寿司屋さんの息子で、運動神経抜群な中村君だった。

その頃って、運動神経抜群〃人気者って言うのがお約束で。

初恋だって気付いたのは、3月のひな祭りのとき。

その時代、給食にお祝いのケーキが出る日があった。

なのに、あたしは季節はずれの水疱瘡で休んでた…………。

「蘭。これ、近所の子が届けてくれたわよ？」

「誰？」

「中村君…………って言ったかしら？この辺じゃあんまり見かけない子だったけど」

「え？」

あたしが暮らしていたのは、父の勤めていた会社の社宅。

何棟もある団地で、その別の棟には同じクラスの中村君がいる。

でもその中村君なら、母も顔を知っている……………。

その母が知らなくて、同じクラスの中村君って言えばただ一人……………。

窓から外をのぞくと、歩いて帰っていく【中村君】の後姿。

あたしは、中村君が見えなくなるまでずっと見送った。

学校に復帰して数日で春休みに入り、意識してしまつてうまくお礼を言うことが出来ないまま進級した。

2年から3年のクラス替えはなくて、中村君も同じクラスにいるはずで。

だからきつと、ちゃんとお礼を言うことが出来るときがあると思つてたから。

でも……………3年生になって、そのクラスにも学校にも……………中村君はいなかった。

急にお店を閉めて、転校してしまったとのことだった。

引越し先も分からず、あたしは結局ちゃんとお礼を言うことが出来なかった。

まだ荷物を運び出したりしているのを見かけることもあり、そんな

時は中村君に会えないかとすぐ近くにあった信号機のそばでお店の
ほうを伺っていたこともある。

でもあたしは、中村君にそれ以来会うことは出来なかった。

出会いとバスケ

4年になって、学校の部活に参加できるようになって、丈夫じゃなかったあたしは少しでも体を鍛えようとミニバス部に参加した。

男子はサッカー部か、少年草野球チームへの参加。

女子はミニバスが、あたしの学校でやっていた部活だった。

走り込みで吐きそうにもなったし、とにかくダッシュがつらかった。

よく熱を出しては休んでいたし、ダッシュなんて夢のまた夢で。

だからよく怒られた。

ディフェンスのトレーニングは、腰を落としたままのカニみたいな格好でのステップ。

それを体育館で延々に繰り返す。

でもそんなトレーニングで、徐々にではあったけれど体力が付いていったのは間違いなかった。

朝は7時半には学校に行つて、体育館に向かう。

それから始業まで、ずっと朝練の毎日だった。

日曜日は市内の学校に遠征、大会とあまり遊ぶ暇もなくなった。

夏休み、朝練の後に久々に幼馴染のあっちゃんと遊ぶ時間が出来た。

1つ下の女の子で、厳しかったあたしの両親と違って、欲しいものは何でも買ってもらえていて、幼心にうらやましかったのを覚えている。

そんな彼女が、引っ越してきたからと引き合わせてくれたのが、あたしと同じ年の權だった。

痩せて浅黒い肌の、目の大きな權。

あたしにとってそれは、今思えば運命的な出会いだった。

あっちゃんに誘われて、たまに遊んだりした時、權も1つ下の弟のキヨシ聖も一緒にいたりして。

引っ越してきて、近所に友達はいなくって、でも年度内は前の学校に越境通学をしていて、休み明けの学校では会うことはなかった。

そんなに遊ぶことはなかったけど、なんとなく気になる存在ではあった。

『気のせい気のせい………』

そう思つて、あたしはひたすらミニバスにのめり込んだ。

徐々に上達して、あたしの得意技はレイアップシュートではなくてフックシュートになって、ディフェンスも結構しつこいつて分かつて。

時たまだけど、練習中の紅白戦でそれを見せるチャンスもあった。

秋になって、冬が来て・・・インドアのバスケットのシーズンが来て。

どんだんのめりこんでいったことで、幼馴染たちと遊ぶ機会も減つていった。

不可解な気持ち

春、5年生になったあたしのクラス担任は、ミニバスの監督で。

すごく強面で、ものすごくーーーーーく苦手だった。

体育の時間も、ミニバス部ってことで、体育の時間は何かにつけて見本をやらされた。

跳び箱とか・・・・・・・・鉄棒とか・・・・・・・・。

出来ないと悔しいから、体育の授業は特に必死だった。

唯一苦手だったのは・・・・・・・・水泳だったけど。

実は・・・・・・・・あたし、5年の夏の段階で、泳げたのは15mだけ。

それがものすごく情けなかった。

でも丈夫じゃなかったことで、それまでの水泳の授業は見学が多かったから仕方ない。

でもどこかのプールで特訓・・・・・・・・なんて出来なかった。

部活も習い事もあって、両親も進んでプールになんて連れて行ってくれなかったし。

櫛は、同じクラスにはならず、隣のクラスに編入した。

転校早々、女子には人気が出て、おいそれと近寄れなくなった。

でも櫛は、そんな女子よりあたしに声をかけてくれたし、転校半年前からの付き合いがあることで、女子たちの中には【蘭は櫛の幼馴染】っていう枠組みが出来上がったらしい。

櫛は草野球に加えて、学校のサッカー部にも入ったから、実際にはあんまり一緒にいる時間はなかったけど。

でもたまに同じ時間帯に下校するときは、一緒に帰ったりすることもあった。

そんな時、なんとなくはしゃいでる自分に気付いていた。

『なんなんだろ……これって……』

あたしはそれが恋だったことに、しばらくの間気付くことはなかった。

頑張れって言われて

6年になると、対抗試合が多くなり、休みの日も遠征があったりと忙しかった。

あたしは、フォワードのポジションを貰って、試合に臨んでいた。

とにかくコートの中を走り回ることの多いポジションで、センターの戻りが間に合わなかった時やリバウンドの時には、フォワードがフォローを入れないといけなかったし。

シュートを狙うのも、当然フォワードで。

プレイをする上で、一番走ることを要求された。

あたしのディフェンスはしつこくて、市内でも有名なチームのフォワードを、何度か押さえ込むことが出来た。

「あんた、相当しつこくて、やりにくかったよ」

その彼女が、試合後にくれた一言だった。

『そう言ってもらえて嬉しいよ。ありがとう』

「あんた、名前は？」

『蘭。結城 蘭。』

「あたしは舛宮 あかね。また中学の対抗試合で会いたいね」

『うん。またよろう』

冬の大会ではブロックが違って、彼女と対戦することはなかった。

そして、また春。

卒業前の最後の冬、新人戦のあとで、卒業生のための試合を地区の5校で総当たり戦を組んだ。

試合会場は、あたしたちの慣れ親しんだ体育館。

そして、あたしたちはそれに全勝するつもりで、強気のプレイを繰り返した。

『あゆ子!!!!!!』

2試合を勝ち進めて、3試合目。

何度目かのラフプレイで、同じフォワードでエースだったあゆ子が転倒して、ひざを強打した。

どんどん腫れ上がっていくひざは、プレイ続行が不可能だとはつきりと物語っていた。

あゆ子はそこで退場し、あたしがシューターとしてプレイすること

になった。

なんとか接戦で勝ち進みはしたものの、チームは意気消沈気味。

あと1試合・・・・・・・・。

でも正直、エースのあゆ子がないのは、ものすごく厳しかった。

「蘭」

休憩中に、水飲み場で顔を洗っていた。

背後からタオルを差し出され、思わず受け取ってしまったけれど声のほうを振り返った。

「櫂・・・・・・・・見に来てたんだ」

「うん。蘭の最後の試合だろ？だから見に来た」

「ありがと。3試合はなんとか勝てたけど、あゆ子が負傷退場しちゃったから、次は難しいかも・・・・・・・・」

「蘭・・・・・・・・蘭なら大丈夫。俺、ずっと見てるから。蘭なら絶対に勝てる。だから頑張れ・・・・・・・・」

「櫂・・・・・・・・」

「頑張れ」

「うん！」

最終試合、櫛は体育館の2階でコートを見ていた。

あたしは、櫛のその視線に守られているような気がしてた。

ほんの3点差で、あたし達は目標だった全勝で試合を終えることが出来た。

初めてのバレンタイン

2月になって、学校では間もなくやってくるバレンタインデーに、女の子たちは盛り上がっていた。

そして、櫛に渡すんだと……何人もの女の子がいるのも分かってた。

櫛は誰のを受け取るんだろう……。

それを考えてるだけで、凄く胸が苦しかった……。

それから、何日も考えた。

なんで苦しいんだろうって。

あの時……、櫛がずっと見てるって行ってくれたから頑張れた。

せめて、お礼のつもりで……あたしも櫛に……ふとそう考えた。

お礼……？

ほんとにそうなのかな……。

そうなら……ここまで苦しいのかな。

『もしかして……』

あたしはこの時、初めて櫂への恋心に気付いた。

小学生のあたしにとって、少ないお小遣いで買えるチョコレートなんてたかが知れてて。

それでも精一杯、美味しそうで、きれいなチョコレートを選んだ。

バレンタイン当日も、あたしの隣の席の男子が協力してくれた。

彼は、櫂を屋上の出入り口のところに呼び出してくれた。

「蘭？どうした？」

『……ごめんね、呼び出して。渡したいものがあって……』

『

そう言って、チョコレートを櫂に手渡した。

「あ、あー……」

『……大会の時は、応援してくれてありがとう……。それと、あたしは櫂が好き……。』

「……ん」

それだけ言っと、あたしは櫂の顔を見ることが出来ないまま、階段

を駆け下りた。

次の日からは、もつと長い間・・・櫂の顔を見ることも、話をすることもままならない状態になるなんて気付きもしないで、ただただ教室まで走って戻るのが精一杯だった。

中学時代

4月になって、自宅から20分も歩く場所にある中学に進学することになった。

一番学区のはずれだったから、そんな通学時間が必要になってしまった……。

あたしの通っていた中学には、バスケット部はなかった。

教えられる先生もいなくて、設備はあったけれど……バレー部と男子バトミントン部があったから、必然的にバスケットに使うスペースが無かった。

あたしはその鬱憤を晴らせる運動部を考えた。

權はサッカー部に入ってたから……近くにいられる部活が良かった。

バレンタインからずっと、あれこれ噂されていたあたし達は、話をする機会もなくなっていた。

少しそばにいただけで、泣き出す女子もいたし、男子は逆にあたし達をはやし立てたから。

他の小学校からきたはずの生徒ですら、噂を知ると冷やかすようになっっていた。

だから・・・・・・・・一緒にいることは出来なかった。

そしてあたしは少しでも傍にいられる陸上部を選んで、中距離と障害を教え込まれた。

3年の春・・・・・・・・。

夏の総体に向けてトレーニングを開始した。

あたしは、最後の総体は障害一本に定めていた。

それが一番タイムも伸びていたし、春の計測会ではかなりの好タイムだったから。

なのに・・・・・・・・・・あたしの最後の大会は、散々なものになった。

大会初日、順調にあたしは勝ち残ったが、学校に戻ってからの走りこみの最中に事故があったからだ。

2日目の朝・・・・・・・・テーピングでガチガチに固めた左足首は、その日の午後に行われる準決勝に出場したあと、ドクターストップとなった。

前日の午後、走り込みをしていたあたしたちの傍で、ノックをしていた野球部員がいた。

あたしの担任だった教師が顧問で、その日はロードワークに出ているはずだった。

なのにサボって、ノックに興じていたわけで。

そのノックで受け損ねたボールが、いくつもあたしたちの方へ飛んだ。

陸上部の顧問のみゆき先生に何度注意されてもやめず、あるうことかそのうちの1球があたしの左足首にヒットした……………。

無理を押してテーピングで固定までして準決勝に出場しボロ負け、そのあとしばらく松葉杖のお世話になる羽目になった。

決勝でたたき出された最高タイムは、あたしのベストタイムよりコンマ2秒遅かった。

それ以来、あたしは野球が嫌いになった……………。

出場できたら、この手に出来たかもしれない県NO.1の称号。

それが、一部の不真面目な野球部員の行いで、消えてしまったんだから。

それから……………少し荒れ始めたあたしは、学校でも評判の悪かったクラスメートと付き合いだした。

それをいつも無言で、廊下の向こうから心配そうに見ている権には気付きもせずに。

あたしが權を見てる時に目が合いそうになるとあたしが逸らし、視線を感じてその視線を追うと權の姿があつて。

でも、お互いに一度も口を開くことは無かつた。

受験までの間、あたし達はそんな関係のままだつた。

変わってしまった自分

生活の荒れたあたしには、まともな受験先などあるはずもなく、あたしは成績など度外視をされて唯一受けられたのは滑り止めでも有名だった近所のマンモス私立高校だけだった。

そこは、地域でも有名な、問題児の集まった高校だった。

当然、つるんでいた仲間もみんな、この学校を受験した。

髪を染めていても、パーマをかけていても……そんなのは当たり前になっていく学校だ。

喧嘩は日常茶飯事、一応禁止されているバイクでの事故もしょっちゅうで、そのまま亡くなった生徒もいた。

喫煙を見つかって、停学……なんてのもざらだった。

「お前らが受けられるのは、この学校くらいだ。受験できるだけでもありがたいと思え」

野球部顧問でもあった担任の台詞。

この担任がきちんと野球部員を引率していれば……あの時、あんな打球に当たらなければ……そんな思いで担任を睨み返した。

「なんだ、その反抗的な目は！！」

そう、逆に罵倒された。

秋に同じクラス的女子生徒が、いじめで摂食障害になり、衰弱死した。

すごくまじめな子だった。

その時もその担任は、あたし達グループを責め立てた。

実際にいじめていたのはあたし達ではなく、逆にいい子ちゃんを演じていた女子達だつてことにも気付きもしなかった。

あたし達は・・・・・・・・・・同じクラスメートの前で、無実の罪で「人殺しだ！」と、亡くなったクラスメートの父親と担任になじられた・・・・・・・・・・。

当然、学校中にその話は噂され、あたし達に近付こうとする生徒はいなくなった。

たった一度の、運命の糸の掛け違い・・・・・・・・・・それで、あたし達は誰にも守られることがなくなった。

自分達で立ち直る術を見つける事も出来ない、たった14で学校からは見捨てられてしまったんだ・・・・・・・・・・。

本当にいじめを働いていた生徒ですら、あたし達を遠くから伺っていた。

受験が終わって、一般試験ではなく推薦での入学だったあたしは、誰よりも早く結果が通知された。

勿論、学力的に問題は無かったので、当然合格。

でも、喜びなんて無かった。

行きたくて行く学校じゃない。

そこしか行くあてが無かったんだ・・・・・・・・。。。

合格通知を無言で担任から受け取ったあたしは、たった一人で学校を出た。

「・・・・・・・・・・蘭!!」

後ろから追ってきたのは、もう3年話していなかった櫛だった。

「・・・・・・・・・・あたしなんか話しかけないほうがいいよ。櫛が悪く言われる・・・・・・・・」

「関係ないよ。それより、受験どうだった？」

「・・・・・・・・・・受かった・・・・・・・・・・」

「そっか！良かったな！おめでとう!」

『おめでたくなんかない……。あんな学校じゃ自慢にもならないよ』

「でも高校には行けるんだぞ？」

『そりゃそうだけど……。行ったところで』

「それよりお前、もう帰るのか？」

『残ってたって、邪魔者扱いだからね』

「……。にあわねえよ……。そんな格好……」

伸ばした髪は茶色に染めて、学校指定の皮靴は1cmほどの厚みに潰され、制服も着崩していた。

『放っておいて……。どうせ家でも学校でも……。あたしは邪魔者だからさ』

「蘭……」

『じゃ、帰るから……。』

櫛は黙ってあたしを見送った……。

二股に分かれた道で右に曲がって、遠回りだけども少しだけ離れて、黙ったまま話すことなく同じ道を通った。

その右の道に曲がっていくあたしを見ているのを、なんとなく背中を感じていた。

なんであたしの進路を權が知ってたのか、それには気付いていなかった。

最後の学生生活

受験の後から、学校以外では頻繁に声をかけてくるようになった櫛。櫛の親友、悠太も一緒に、部屋にこもってたあたしを引っ張り出しに自宅までも来るようになった。

櫛の家は、同じ社宅の別棟だったからすぐ近所だったけど、悠太はあたしの家でかかりつけにしていた診療所の裏にある児童施設。やむを得ず、家族と一緒に暮らすことの出来ない子供たちの、保護施設の1つだった。

今で言う、里親みたいなものだった。

悠太はクォーターで、ハーフだった父親は横須賀で既に別の家庭を持っていて、長患いで入院している母親と病気がちの祖母との3人暮らしだった。

それで仕方なく、悠太の祖母がその施設を頼ったわけで。

でもお日様みたいに笑う悠太は、ひねくれてしまったあたしにはすごくまぶしい存在だった。

そして櫛も、昔と変わらない優しさで、あたしに接してくれた。

でもあたしのひねくれ具合がそうそう変わるわけでもなく、まじめ

で明るい二人に対して、茶髪で服装も徐々に派手になっていくあたしが一緒にいるのは、近所でもアレコレうわさになった。

『……だから言ってるじゃん。あたしといたっていいこと無いって』

「蘭ちゃん、そんなの関係ないって。言いたいやつには言わせとけばいいんだって」

「そうだ。俺らが好きで、蘭を引つ張り出してるんだからな」

『あんたら………バカじゃん?』

「ほつとけ」

「ははは………やっぱ蘭ちゃんと櫂は仲いいよな………。うわさなんてほつといて、ちゃんと付き合っちまえば良かったのに」

「………こいつが俺のこと、避け始めたんだから仕方ないだろ?」

「そうなら櫂が行けばよかったじゃんか」

『………勝手なこと言ってるじゃないでよ』

「今からでも遅くないんじゃないの?」

「………」

「蘭ちゃんも気持ちが変わってなくて、櫂もそうなら………今か

らでも遅くないだろう？」

ニコニコと笑いながらそう言い切った悠太に、あたし達は何も返せなかった。

そんな関係はずっと続き、卒業して高校に進学しても変わらなかった。

唯一、悠太が中学を出て実家に戻ったことくらいだろうか。

權と悠太は同じ高校に進み、その明るさから悠太にはしばらくして彼女が出来た。

權は相変わらずモテてはいたようだけれど、同じ学校の子には目もくれないと悠太が話してくれた。

あたしは遊ぶお金が欲しくて、近所でバイトを始めた。

学校の後そのまま行って、帰宅するのは9時過ぎだ。

權はそんなあたしを、乗り始めたバイクで迎えに来ることもあった。

でも……付き合うとかじゃなく、幼馴染のままだった。

その証拠に……權には彼女が出来た……。

それも……あたしと同じ学校の、同じ学部の子だった……。

許せない女

「あんたでしょ？ 櫛君の幼馴染って」

『・・・・・・・・・・』

バイトが休みだったその日、帰り道に通った公園で声をかけられた。

「あたし、これから櫛君のうちにいくとこなんだあ」

『・・・・・・・・・・そ。勝手に行けばいいじゃない。あたしには関係ない・
・・・・・・・・・・』

「ふふふ・・・・・・・・先週ね、あたし櫛君とエッチしたんだ。櫛君のつてこんな形してるの・・・・・・・・知ってる？」

彼女は櫛の・・・・・・・・ソレだと言いながら、地面に何処からか拾ってきた枝で図を書き始めた・・・・・・・・。。。

『・・・・・・・・・・よくそんなプライベートなこと、平気で回りに言えるもんだね』

「あらだって、別に恥じることじゃないもの」

『あんたはそうでも・・・・・・・・櫛はどう思っただろうね』

「は？」

『……言つとくよ。櫛はあたしが一番つらいときに傍にいてくれた。だから……傷つけるようなことしたら……殺すよ?』

「な……どうせ、本気じゃないし。知ってる? 櫛君でマザコンだつて」

「お母さんお母さんって……もっくんざりなのよね」

櫛は昔から両親を、特に母親に優しい。

それを……マザコンなんて言葉で片付けようとするなんて……。

『そんな言い方……許さない……』

あたしは優しい暖かな櫛の母親も、ユニークな父親も大好きだった。

それなのに……何も知らないくせに……。

『今後も付き合つつもりなら、こんなこと続けたら……あなた、殺すよ?』

彼女を睨みつけると、来た道に戻るようにその場を立ち去ることにした。

人の気持ちはよく分らない。

でも、櫛がなぜあんな女と付き合いたと思ったのか……そ

れがどうしても分からなかった。

あたしなら．．．絶対に櫛を貶めるようなことは言わない。

なのに．．．．．なんでだろう．．．．．。

そう強く感じた、高3の夏の初め。

けれど、その夏の終わりに、櫛は強いダメージを受けて彼女とは別れた。

彼女が何を言ったか．．．．．思い浮かべるのも容易いことだった。

櫛はあたしを呼び出すと、サバイバルナイフをちらつかせて．．．．
・「死ねるモンなら死にたい」．．．．．そう呟いた。

その時あたしは、櫛を力いっぱい抱きしめるしか出来なかった。

翌日、あたしは．．．．．2週間の停学になった。

あの女を．．．．．廊下で思いっきり張り倒した罰として。

甘ちゃんな報復と決意

あたしにとって、最悪の事件が起きたのは、それから3日後の日曜日。

櫂が知り合いにウインドサーフィンを教わると言うので、近くの海に付き合っていた。

櫂と知人の男性が生みに出ている間、あたしは砂浜でぼーっと海を眺めていた。

その時、背後から近付いてくる影には気付かなかった。

『！！』

背後から口を塞がれて、抱えられるようにあたしは連れ去られた。

手足を拘束されて、ワンボックスに押し込められる。

目も口も塞がれ、拘束された状態で着ていたキャミソールをむしり取られ、ジーンズも下着もずり下ろされた状態にされる。

『んんん~~~~！！』

必死で暴れて抵抗して……陵辱されることはなかったが、辱めを受けている姿を写真に取られている音が聞こえた。

しばらくして、拘束を受けたまま……駐車場に放り出された。

下卑た2人の男の笑い声と共に、小さく聞こえてきたのは一人の女性の声。

「バカにした報いよ」

『！』

忘れるわけもない。

權を馬鹿にして、捨てたあいつ……。

許せない……。

「これに懲りたら、ちょっとはおとなしくしてくんだな」

うつすら笑いながら言う男の声。

体は拘束され、目も口も塞がれたままだったあたしは反論することも叶わなかった。

でも、心の中だけは、この屈辱に負けるわけにはいかないという思いだけが渦巻いていた。

ワンボックスが走り去ってすぐ。

「蘭!!どこだ!!」

櫛があたしを探す声が聞こえた。

「蘭!」

ものすごい勢いで駆け寄ってくる足音が二つ。

櫛と、多分ウィンドを教わっていた男性だろう。

「櫛!このタオルを使ってやれ!」

「すみません」

大きなタオルにくるまれて、すべての拘束が解かれていく。

『……………櫛……………』

「大丈夫か?」

『大丈夫……………。やられてはいないから……………脅しと写真だけだから』

「でも……………」

『大丈夫。これくらいじゃ負けない……………』

その後、少し落ち着いてから着替えに持ってきていた櫛のTシャツを上から着込み、櫛のバイクの後ろに乗り込んだ。

「蘭ちゃん……本当に警察呼ばなくていいのか？」

『うん、必要ない。あたしのカタはあたしがつける』

男の力を借りないと勝てないような、あたしはそんな愚かな女じゃない。

それをきつちり……解らせてあげる……。

嘲笑

新学期。

なんとなく、不穏な雰囲気を感じる。

登校してから、二つ離れたクラスの生徒や、陸上部のメンバーの視線を感じる。

視線だけじゃない。

一部では嘲笑とも取れる笑い声も聞こえる。

ああ、あの女の仕業か…。

そう、すぐに思いつく。

だけど、あたしには恥ずべきことは何もなく、他人に笑われる筋合いもない。

「蘭……」

いつもつるんでる幸が、心配そうに声をかけてくる。

『……何』

「……いいの？あいつら、好き勝手な事……」

『別に恥じる事はしてない。あのバカ女が、一時期調子に乗れるだけだから』

「バカ女？」

『あたしに殴られた腹いせに、人を使って私を陥れようとしたバカ女。こんな事をすれば、あたしが小さくなるって思ってる。脳みそ足んない証拠でしょ』

「確かに……そうかもw」

『大体さあ……。目隠しとかされてるのに、あたしだって分かる自体さあ、おかしくね？自分がホシだって、バラシてるだけじゃん』

「そっぴや、そっぴや。あつたま悪いw」

あたしたちは、こっちを見ながらコソコソ笑っているバカ女……。ミ力を見ると、笑ってみせた。

喧嘩売る相手を間違えてんじゃねえよ……。そう視線に込めて。

うん、間違えてるよ。

あたしはこれ位じゃ、潰れたりしない。

人を使わなきゃなんにも出来ないような、やわなお嬢ちゃんじゃな

い。

「ねえ、ミカに聞いたんだけどお……あの写真、蘭だって……ホント？」

『……何が言いたい？そうなら、気の毒だとか慰めるか裏でコソコソ笑うかどっちかなんじゃないの？』

「や、別にホントにそうなのかなって思っ……」

『だいたい、あれがあたしなら……ミカがそれを知ってるのっておかしいと思わないわけ？あたしなら、嵌めたから知ってるんだって思っけどね』

そう、嵌めたから知ってるんだよ。

あの写真をそうやって使った段階で、自分で自分の首を絞めたんだよ。

あとは自分で自滅していけばいい。

あたしは可哀想なんて思わないし。

噂を聞き付けた生活指導の先生に問い詰められ、さっき噂の真相を聞きに来た子へと同じように返答した。

そしてミカもあたしの後に呼び出されたらしかった。

指導教官室

「結城。正直に言え。この写真がお前だって、あちこちで聞くが本当はどうなんだ」

生活指導の大塚先生。

小さくて、丸坊主で、凄く厳しいことで有名な人だ。

今までは散々、バスケで鍛えた足で逃げてきたけれど、今回はまず担任に捕まって連行されたような感じだった。

「……あたしだったらどうなんです、先生？停学ですか？それとも退学ですか？」

「それは認めたってことでいいのか？」

「認めたくはないですけどね。でも、自分から嬉々として脱いだわけじゃない。それでも停学だ退学だって言うなら、こっちもそうしてくれて結構です」

「結城！」

「だいたいね、先生。その写真の出所と、あたしだって言い出したやつが目星はついてるんですよ？まさかと思えますけど、顔もこうつて隠されてるのにあたしだって分かるのは、当事者が関係者だけだって知ってますよねえ？その上で、あたしにこうやって聞いてるんですよえ？」

「む・・・・・・・・」

唸るように声をあげると、ただでさえ強面の顔をゆがめる。

『大塚先生、あたしもそれなりに悪さはしてるけど、人を貶めるような卑怯なことだけはしない。因みにあたしが罰を受ける時は、そいつも巻き添えにしますから。それ、覚えておいてくださいよ?』

「こら、結城! ちょっと待て!」

あたしはもう話を聞く気はなかったし、あたしからミカのことを教えてやる気もなかった。

だから大塚先生の怒鳴り声をあえて無視して、指導教官室を出た。

あたしはこれ位じゃつぶれたりしない。

自爆するだろうミカを思うと、笑みが浮かぶ。

でも、そんなことで許してやろうなんて思わない。

あたしは、あたしの事よりも權を貶めた事が許せないから。

權はあたしにとって、唯一の心の拠り所・・・・・・・・それを傷つけるのは許せないから。

数日の間、自主的に学校を休んだ。

まあ、その間、おとなしく自宅にいたわけじゃないけれど。

久々の登校をすると、あざ笑っていたはずのミカの顔が青ざめているのを見かける。

『ふうん……先生もバカじゃなかったか……』

「蘭!!」

駆け寄ってきたのは幸だった。

「蘭が休んでる間にさ、大塚のやつが例の写真の出所、調べたらしいよ。で、さっきミカに呼び出しがあったんだって」

『……自業自得でしょ。気の毒だなんて思わないし、あたしは堂々としてるだけ』

あたしは世間で言いいい子じゃないけど、今回はミカが自滅しただけであたしは何もしていない。

あたしは權を守ろうとしてるだけなんだから……。

自主的に早退

「あんたでしょ！あんたが先生に！」

休み時間、どうやら大塚先生に解放されたいらしいミカが怒鳴り込ん
でくる。

「あたしがやったとか、そんな風にあたしのこと言っただでしょ！
許さないから！」

『……あたしは何にもいう必要はない。あの写真があたしだ
って分かるのは、当事者のあたしか関係者である犯人しかいないっ
て言っただけだから』

「な……！！」

『それから……ミカ。あの時……あんたが声を出さな
きゃあたしにはばれなかった。今回もあの写真をばら撒いて、関係
者しか知らない情報を流せば、犯人は自分だって言うようなものじ
ゃん』

冷たく感情を抑えた目でミカを見る。

『石を投げつけるなら……同等の力を持つてる者同士で
やって。とりあえずあたしに勝ちたかったら、まずは自分の力で対
抗してくれないと……』

そう言い捨てると、あたしは荷物を持って教室を出た。

3階にある教室から、昇降口に向かう途中で大塚先生以上に強面の、まるでその道の出身かのような教師が見つかる。

慌てて階段を駆け下りて、靴に履き替えると20mほど離れた校門までダッシュし、校門を乗越えた。

走り続けて、脇道から駅へ向かう道を進む。

自宅は学校からさほど遠くないのだけれど、今日はそのまま權と出掛けた海に向かった。

「あれ？蘭ちゃん？」

浜につくと、一人のサーファーに声をかけられた。

『・・・・・・・・どうも』

「学校じゃないの？」

『自主早退つてことで・・・・・・・・』

「ははは！そっか。まあ、俺も良くやったしな、なんも言えねえや！」

櫛にウインドを教えていた男性だった。

『えーと、高木さんでしたよね。この間はありがとうございました』

「勝己でいいよ。高木さんなんて、くすぐったいからさ」

『はあ………』

「例の件は片付いたの？」

『まあ、一応………』

「そっか。櫛もすげー心配してたぞ？連絡してやった？」

『………いえ、まだ』

「知らせてやんなよ………喜ぶから」

『あとで行ってきますし………』

「そっか」

『ウインド、見てもいいですか？』

「ああ、いいよ。じゃ、ちょっと行ってくるよ」

海に出て行く勝己さんを見送って、砂浜に座り込む。

櫛が教わるだけあって、この浜ではかなりの腕前のサーファーだった。

あたしはただ何となく、勝己さんの操るボードの青いセイルを見つめていた。

勝己

しばらくして、櫂はすっかり立ち直った。

同じ学校の後輩と、どうやら付き合いだしたらしかった。

心臓が鷲掴みされたみたいに．．．．．痛かった。

ずっと．．．．．言わなかっただけ．．．．．。

こんなあたしじゃ．．．．．そう思っただけ。

でも．．．．．ずっとあたしには櫂だけだった。

彼女が出来たのを知った日、あたしはまた海に向かった。

そして黙って浜に座って、海を見つめた。

「何見てんの？」

後ろからかけられた声に振り向くと、Ｔシャツに短パン姿の勝己さんだった。

『別に．．．．．』

勝己さんは何も言わずに、あたしの隣に座る。

『暇なんですね．．．．．』

「ああ、店はすぐそこだしね。ちょっとくらいは平気だよ」

『店？』

「あれ？知らなかった？俺、そのサーフショップにいるんだよ」

『そうなんだ．．．．．』

浜をあがってすぐのところにあるちょっと大きなショップを見る。

「ウインドのスクールとね、あとちょっとしたカフェやってるんだよ」

奢ってやるからと引つ張りあげられて、渋々立ち上がる。

勝己さんに手渡されたオレンジ色のドリンクを手に、ショップの外のベンチに腰掛けた。

「．．．．．權のこと、考えてる？」

『．．．．．別に』

「．．．．．彼女．．．．．出来たんだって？」

『みたい．．．．．』

「そっか．．．．．」

時々グラスに口をつけながら、海を眺める。

「なあ・・・・・・・・・・蘭ちゃん・・・・・・・・・・」

店から出てきてあたしの隣に立つと、海を見ながら勝己さんがぽつりと呟く。

『はい・・・・・・・・・・』

「蘭ちゃん・・・・・・・・・・俺と付き合ってみない？」

『え？』

「俺と付き合って・・・・・・・・・・？」

隣に立つ背の高い男性ひとを見上げる。

ちょっと照れくさそうな日焼けした笑顔を、あたしはただ見つめていた。

免許と失恋の自覚

勝己さんに付き合っただけと言われ、あたしは即答出来なかった。

『少しだけ……考えさせてください』

「ん。いいよ、いい返事……待ってる」

しばらく海を見つめた後『今日は帰る』と告げて、あたしは駅に向かって歩き出した。

一番近くの駅までも、歩けば結構かかる。

でも海からのまっすぐな道が駅に続いているので、色々考えながら歩くのにはちょうど良かった。

どれ位経ったのかぶらぶら歩いて駅に着くと、そこから自宅の最寄り駅までのバスに乗る。

最寄り駅からは更にバスを乗り換えるのだけれど、そこは裏道を歩いていけば20分位だからいつも歩く。

勝己さんに会うにはそれ位乗り継ぎや時間もかかるから、原付の免許でも取るべきか考える。

週に3日しているバイト代も、結局中学で吸い始めてしまったタバ

コ代程度しか使わない。

だから、そこそこの金額が貯まっていた。

『別に勝己さんに会うからとかじゃなくても……あれば楽チンだよなあ……』

そう、ひとりごちた。

その日、久々に悠太の携帯に電話をかけた。

目的は、免許を取るのに色々教わるためだった。

「權に教われればいいのに」悠太はそう言って笑った。

『新しい彼女が出来て浮かれてるのに？』

「あー……まあね。でもそんなに長続きしないんじゃない？」

『知らないよ、そんなの。で、教えるの？教えないの？』

「分かったよ、俺でいいなら教えるってば」

バイトと悠太のデートがない日は、放課後に待ち合わせて教えてもらう日々が続いた。

たまに悠太の彼女がついてくることもあったけれど、本当に勉強してるだけなのを見て安心したのか何も言わずにニコニコ見ているだけだった。

夏からすっかり秋になり、もうすぐ冬だなんて感じる季節になって、あたしはなんとか免許を取った。

原付だったから一発で取ると、悠太を呼び出して一緒にバイクショップへ向かった。

選んでもらった原チャリと、メットを買って貯金はほぼ消えた。

『3年バイトで貯めた貯金がキレーに消えたよ……』

「まあなー、安くはないもんな。俺だつてばあちゃんが保証人になつてくれたからローン組めたんだし」

『まあでも、悠太のおかげで無事に免許も取れたし、2・3日で原チャリも来るし』

「おお、そうだな。感謝しろー？」

『はいはい、感謝してますよ』

「なんだー？投げやりだぞー？」

『んなことないでしょうが』

もうすぐ高校も卒業。

悠太は美容師になるために専門学校への進路を決めていた。

「權は進学するみたいだぞ？」

『ふーん・・・・・・・・』

どこを希望しているのかは、あえて聞かなかった。

彼女でもないただの幼馴染のあたしが、詳しく知る必要もないと思
ったから。

原チャリが届いた日、あたしは久々に櫓に会った。

「よう、久しぶり。いつの間に免許取ったんだ？」

『・・・・・・・・2学期に入ってから悠太に教えてもらって・・・・・・・・取
った』

「悠太？俺に聞けばいいのに」

『忙しそうだったし・・・・・・・・』

「そっか・・・・・・・・。そっぴゃお前さ、最近海・・・・・・・・行っただ？」

『2ヶ月位・・・・・・・・行っってない・・・・・・・・』

「そっか。いやあのな・・・・・・・・高木さんって覚えてるだろ？高木
さんがさ、お前に会いたって言うててさ」

『・・・・・・・・』

「最初連れてった時からさ、紹介しろってうるさかったんだけどな。

「目惚れらしいぞ？お前も隅に置けねえな」

『そう・・・・・・・・分かった・・・・・・・・』

「あの人、いい人だしさ・・・・・・・・付き合ってみるのもいいと思うぞ？」

『分かった。考えてみる。じゃあね・・・・・・・・ガソスタ行ってくるから』

近所のスタンドまで新しくきた相棒に乗っていくと、スタッフの人に教わりながら満タンに給油する。

權の中には、あたしのポジションは幼馴染と言っところだけ。

それが、分かってたけれどはつきりした。

泣きたかったけど、こんなところじゃ泣けなかった。

そしてあたしは、そのまま久々に海を目指した。

新しい居場所の作り方

「おお？いつの間にそんなもん取ったんだ？」

冬間近の海は閑散としているけれど、ここはウインドサーファーがよく集まる海だったので、今日も何台も車が停まっていた。

久々に顔を出すと、勝己さんは満面の笑みで迎えてくれた。

『先週取ったばかりで……』

「そつか。でも気をつけるんだぞ？雪の時とかは絶対に乗るなよ？」

『はあ……そんな日はどっちにしても乗らないです……』

『』

「……なんか飲むか？今ならカフェの方は誰もいないから、ゆつくりしてって？」

『はい……』

カフェに入ると、カウンターのスツールに腰掛ける。

「元気だった？」

『うん．．．．バイトと免許取る勉強してたから、ちょっと忙しかったけど』

カフェオレを口にしながらそう答える。

「．．．．權に教わってたの？」

『ううん、別の幼馴染』

「．．．俺に教わればよかったのに」

『や、でも勝己さんは仕事あるし』

「なんだ．．．俺はそれもさせてくれない程度の存在？」

『え．．．．と．．．．』

「．．．．やっぱり．．．．俺じゃだめ？俺じゃ權を忘れさせてやれない？」

『勝己さん．．．．』

「俺、權にも話したよ。一目惚れだったって。いつもつまんなそうにしてるようで、でも目の奥はいつも寂しそうです。それ見たら忘れられなくて、傍にいてやりたいって思うようになった」

『．．．．』

「やっぱだめか？俺じゃ、好きになれない？」

『……あたし、中学の頃から学校でも家でも居場所がなくて。唯一受け入れてくれたのが、權ともう一人の幼馴染の悠太だけで。だから……。他の人に必要とされるって分かんないっていうか……。だから就職にも意欲がわなくなつて……。まあ多分どこかでバイト位はしますけど』

「じゃ、うちで働けば？カフェの方は人員募集中。それで、ここを居場所にしていけばいいだろ？ついでに俺にも居場所を分けてくれると嬉しいんだけどね」

『え？でも……。』

「卒業したら、平日に週1で休み以外は毎日入ってもらうから。それまでは……。週に2・3日研修がてらおいで」

『や、あの……。勝己さん……。そんな勝手に決めちゃつていいもんなの？』

「ん？ああ、ここ俺の店だし？スタッフはウインドの方で一人と、その彼女がカフェでバイトしてるだけだしな」

『あ、そう……。なんだ……。』

「な？決まり！そうしよう？」

『ふつ……。なんか断る隙ももらえなさそう』

「断わるなんて、させるわけないだろ？あ、でも高給はやれないかな」

『え、決定？』

「当たり前じゃん。出来れば俺の彼女のポジションも、是非決断して欲しいけどね」

『ふっ・・・・・・・・』

「やっと・・・・・・・・笑ってくれた・・・・・・・・その顔が見たかったんだ」

「捕獲っ」・・・・・・・・そう言うと、勝己さんはあたしの手を引いてそっと抱きしめた。

新しい居場所の作り方（後書き）

高校編、これで終了です。

温かい腕

高校を卒業すると、ほぼ毎日のようにあたしは海に向かう。

海のそばが勤務先なのもある。

…あたしは春から、勝己さんと付き合いはじめた。

タバコはやめた…と言うより、買ったばかりに取り上げられるから仕方なくだけど…やめた。

デートは主に、勝己さんの部屋か海。

どちらにしても、店のすぐそばだ。

勝己さんは店の二階に住んでいるから、仕事が終わると二階に上がって一緒に過ごすのが主だ。

「蘭、今日は泊まってくたろ？」

「…着替えないから帰るけど」

「いつもそう言うからさ、じゃーん！買っておきましたあ」

「…は？」

8つも年上のくせに、たまに子供染みた事を言う。

そんな勝己さんの事を暗に薦めた櫛は、盛岡の大学へ進学した。

悠太は創からの希望通り、美容学校に進んだ。

お互いに忙しくて、あまり連絡は取っていなかった。

櫛は多分、勝己さんから聞いて知ってはいるんだろうと思う。

あたしも勝己さんも、お互いに櫛の事は口にしなかったから推測でしかないけれど。

「これじゃいやだと言われないように、色々ありますのでご確認ください」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ちらつと睨みつけると、2階に上がってクローゼットをしてみる。

『うわぁ・・・・・・・・こんな誰が着るんだよ・・・・・・・・』

「蘭以外いないでしょ」

『・・・・・・・・Ｔシャツとかさー、そうゆうんだったらまだいいけど・・・・・・・・こんなワンピース、ガラじゃないよ』

「大丈夫だって。絶対に似合うし」

『はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・』

「おい、溜息つくなよ。幸せが逃げるぞ?」

『この服を見たほうが逃げそうだって・・・・・・・・』

「屁理屈言うな。いいから着て見せろって」

『やだよ』

「やだは許しません!」

『エロ親父!』

「たった8つしか離れてないのに親父!？」

『じいいわれなかっただけ嘛だと思つて・・・・・・・・』

「・・・・・・・・ほんとにいつまでたつても素直じゃねーなあ。それでも惚れてんだから仕方ないけどな」

『・・・・・・・・』

クローゼットにまた向き合つて、勝己さんに背を向けた。

「蘭・・・・・・・・」

そつと近付いてくる気配がして、ふわつと背後から抱きしめられた。

「なんでこんなに好きになつちまつたんだろうなあ・・・・・・・・もう

絶対手放してやらないから、覚悟しとけよ？」

顎をつかんで振り向かせるようにすると、性急に唇を重ねる。

『・・・・・・・・んっ』

徐々に激しくなるキスに、息が詰まりそうになる。

わずかな隙に酸素を取り入れようとして、唇の隙間から指を差し入れられた。

『ん・・・・・・・・つぶ・・・・・・・・』

指を噛まないようにして開いた隙間から舌が滑り込んで、口内を蹂躪しつくされる。

付き合い始めてから何度もキスはしてきたけれど、ここまで激しくてすべてを吸い取られるようなキスは初めてだった。

交じり合ってどちらのかも分からなくなっている唾液を、呼吸と共に嚥下する。

唇からこぼれた唾液を舐めとるように舌を這わせると、そのまま首筋に顔をうずめるように抱きしめられた。

「帰りたいって言っても・・・・・・・・帰してやらないから・・・・・・・・」

「

このまま俺だけのものになれよ・・・・・・・・そう囁くように耳元で呟いた。

『・・・・・・・・』

「返事・・・・・・・・しないってことは、OKって事だとみなすからな？」
体の向きを変えられて、そのまま正面から抱きしめられた。

「・・・・・・・・バスケットやった割に、ちっこいよな・・・・・・・・」

『勝己さんがでかすぎるんじゃない』

「そうか？」

その夜、ずっと抱きしめてくれたその腕は、今までの誰よりも
・・・・・・・・優しくて温かった・・・・・・・・。。

初めての夜（前書き）

少女マンガ程度の性表現があります。

不快に思われる方、18歳未満の方はお読みにならないでも、18話から20話でお話はつながっております。

初めての夜

『んん・・・・・・・・』

息苦しくて目が覚めた。

あたしが逃げ出さないようにしているかのように、すっぽりと包み込むように抱きしめられたまま眠っていた。

『重いし』

勝己さんの腕をどけてベッドを抜け出すと、床に散らばったままの服や下着をかき集める。

今日も朝から仕事があるから、クローゼットから下着ととりあえず着られそうな服を出してバスルームに向かう。

シャワーを浴び始めると、ふと浴室にある鏡に目が行った。

それなりに日焼けした肌でも目立つ、胸元にいくつも散った赤い印。

それを目にして、昨夜の事が脳裏を掠める。

キスの後、ベッドルームまで抱きかかえられて運ばれて、ベッドに縫い付けられるように押し倒された。

「蘭・・・・・・・・」

何度も角度を変えて口付けられ、Ｔシャツのすそから入り込んだ大きな掌がそんなに大きくもない胸を包み込む。

『あ・・・・・・・・ふうん・・・・・・・・』

片方の胸をやわやわと揉まれて、もう片方の硬くなった蕾を口に含まれて思わず声上がる。

いつの間にか脱がされたＴシャツやブラをベッドの向こう側に放られて、その間も胸元に口付けられた。

執拗なくらいの愛撫に溶かされて、何も考えられなくなった。

『か・・・・・・・・つみ・・・・・・・・』

腕を伸ばして勝己さんの首にしがみついた。

「蘭・・・・・・・・やっと勝己って呼んでくれたな・・・・・・・・」

『んあ・・・・・・・・かつ・・・・・・・・みい・・・・・・・・』

ジーンズとショーツを剥ぎ取られて、潤いだした中心に指が触れた。

「愛してるよ・・・・・・・・蘭・・・・・・・・」

激しくなる指や舌での愛撫に耐え切れなくなって、意識を飛ばしかけた時に指よりも太くて圧倒的な熱さのものが入ってきた。

『あああっ!!!』

一番奥まで受け入れて、揺すられて、頭の中が真っ白になる。

余計なことは何一つ……櫂の事すら頭から消え去っていた。

新しい自分

シャワーを浴びて着替えを済ませると、簡単なメイクを始めた。

時間はまだ6時になったばかり。

だけど、早朝から波乗りに来るサーファーもいるので、基本的に店のオープンも早い。

そこにやつともぞもぞと起きてきた勝己さんが寄ってきて「おはよう」と頭にキスを落とす。

『おはよう。先に下りて朝ごはん用意しておくから』

「おう、頼むわ。シャワー浴びたらすぐに行くから」

カフェに下りてすぐに簡単な朝食を用意する。

厚切りのトーストに、カリカリベーコントッピングのほうれん草サラダ、プレーンオムレツ、トマトベースにガルバンゾビーンズのスープ。

シャワーを浴びて着替えた勝己さんが急いで降りてくるのを見計らって、コーヒーをドリップする。

「お。新メニューですか？」

そついいながら肩を抱き寄せて、すばやく唇を重ねる。

『早く食べてみて』

「はいはい。いただきます」

『どう……かなあ』

「うん、うまいよ。カフェのモーニングに出してもいいんじゃないか？」

『ほんと？』

「うん。日替わりとか、どちらか選べるようにするとかにするといいかもな」

『そっか。じゃあそうしてみようかな』

「おう、頼んだぞ」

朝食を食べ終えて、食器をさげてすぐに開店準備を始める。

勝己さんもシヨップの掃除やレジ金の準備をし、その間にもう一人のスタッフの輝さんがやってきた。

カフェのスタッフの朱音さんも一緒に来て、アイスコーヒー用のコーヒーや食材の準備をしてくれた。

輝さんは勝己さんと同じ年で、朱音さんは2人の3つ下。

年の離れたあたしを、妹のように可愛がってくれていた。

「あれ？蘭ちゃん。珍しい服着てるわね」

『え、いやあの・・・・・・・・これは・・・・・・・・』

「勝己君？」

『はぁ・・・・・・・・おかしいですか？』

「うっん、似合ってるわよ？」

いつもジーンズに大き目のＴシャツだったけれど、今朝は細身のジーンズにパープル系のチュニック。

「今までの殻を破って、新しい自分になるのもいいんじゃない？」

そう言って朱音さんは、とても優しい笑顔であたしを見た。

穏やかな日々

毎日のようにカフェに來ると、料理をしたりドリンクを入れたりして過ごす。

そして空いた時間には砂浜に座って、ウインドの公衆をしている勝己さんたちを眺めている。

「お前もやってみるか？」

休憩で浜に上がってきた勝己さんが、笑いながらそう声をかけてきた。

『うっん、あたしはいいや』

「遠慮しなくてもいいんだぞ？」

『遠慮なんかしてないよ』

「そうか？」

『うん』

あたしは朱音さんと一緒にシブメニユーを考えたりするのが楽しいし、今はそれだけじゃなく任された店の売り上げアップも目指していかなきゃならない。

そしたら正直、ウインドを習っている暇などないのだ。

ここで働き始めて、既に2年。

勝己さんと付き合い始めてからも……2年。

早生まれ1月に生まれたあたしは、もうすぐ20歳になる。

權はといえば、長い休みの時だけしばらく帰ってくる。

でもいつも早朝から、工事現場でのバイトに出掛けている。

同じような時間に、あたしもここに出勤するからバイクですれ違う。

特に話すわけでもなく、片手を挙げて挨拶する程度だ。

明日の休みは、長年折り合いが悪かった母と出掛けることになっている。

一緒に暮らしてはいるけれど、あたしは実際には寝に帰るだけ。

食事は完全に別々だ。

勤務の関係もあるけれど、折り合いが悪い家族と一緒に食べても美味しくもなれないというのが本当の理由。

その母が、成人式の着物を作ると言い出した。

毎日海に出掛けてはいるけれど、カフェにいるから幸い勝己さんほど黒くはないけど、それでも結構焼けている。

それに元々成人式なんて出るつもりもなかったし、出ても着物なんて着たいとも思ってたなかった。

「親孝行だと思つてさ、行つてやれば？」

そう勝己さんに諭されなければ……行く気もなかったのだけ
れど……。

『着物なんて面倒だよ……』

「えー？俺は見たいけどなー……お前の振袖姿」

『こんな茶髪でさ、こーんな真つ黒なのに着物なんて似合うわけないじゃん』

「大丈夫だつて、絶対に似合うから」

『めんどくさーい……』

「そう言つなつて。嫁に行くまでに出来る親孝行の１つだぞ？」

『んー……』

翌日、反物を選んで小物も注文して……確かに母は満足げだった。

振袖の色は、裾から紺、ブルー、紫、そしてピンクがかった藤色と濃淡のグラデーシヨン。

それに金箔で書かれた絵柄と、金糸の帯。

長く伸ばした茶髪をアップにして使えるように、髪飾りも大振りの花やパールを使っている。

黒く染める予定はない。

どうせすぐに塩焼けで茶髪に戻る羽目になる。

買い物のもと、あたしはすぐにカフェの2階に向かった。

自宅にいたって、やることはないし……父と口論になるだけだから。

「あれ？どうしたの？今日はお母さんと出掛けたんじゃないの？」

カフェに入っていったところで、朱音さんがきょとんと首をかしげてこちらを見た。

『うんそうなんだけどね、終わったからこっちに來たの。向こうにいたら親父と口論になるだけだもん』

「いいの？ああ、勝己君は今はまだ海の中よ」

『うん、分かってる。その間にメニュー表とか色々作っちゃうから』
そう言って肩から提げた大き目のバッグに手をやる。

そこには常に持ち歩いている、モバイルPCが入っていた。

『朱音さんのデジカメ貸して？この間の写真も取り込んだじゃうから料理やドリンクの写真や、新メニューを作った時の写真も入っているデジカメを受け取ると、2階の勝己さんの居住スペースに向かった。』

遭遇

部屋の隅にバッグを置くと、テーブルにモバイルPCを置いた。

スティックメモリーとUSBコード、ACアダプターや持ち運び用に使っているマウスやマウスパッドもバッグから取り出した。

実はノート型のPCのマウス部分を指で操作するのが、あたしはすごく苦手だった。

だからUSBで繋げる小さめのマウスを使っているのだ。

そのほうが、あたしには圧倒的に操作が楽になる。

まずは朱音さんのデジカメから写真を取り込んだ。

それからワードソフトを使って、メニュー表を作り始めた。

ここはファミレスじゃない。

だから極々簡単なメニューで充分ではある。

だけど文字だけのメニュー表よりは、若干でも写真を使ったほうがそれらしいし分かりやすいだろう……。

そう朱音さんとあたしで勝己さんに詰め寄り、メニューを変更することに作り直したりしている。

しばらくレイアウトと格闘して、文字のサイズやフォントの種類・色に悩む。

明るいテラス席でも、ダウンライト気味の店内でも見やすいようにしないといけないからだ。

毎回同じようなイメージにするのも面白くなくて、これでも試行錯誤している。

それでも一応、売りに上げに貢献は出来ているから、文句を言われることもない。

というより、あたしに対して勝己さんは……甘い。

失敗すれば注意はされるし、叱られもする。

けれど、基本的には甘いよね……と、朱音さんも輝さんも笑う。

そんなことないよと反論はするものの、そうかな？とも思っている。

ここまでどっぷり甘やかしてもらうのは、正直初めてで……くすぐったい。

でも唯一の居場所が權や悠太のところだけだったあたしは、突っ張って生きなくてもいい居心地の良さを感じている。

泣きたい時に泣いて、笑いたい時に笑って……自分を隠さなくともいい場所……今のあたしは、ここをそう感じていた。

1月になって、あたしは20歳になった。

勝己さんは、誕生日と成人のお祝いにと、よく気に入って使っているハワイアンジュエリーのブレスレットとリングをくれた。

『よくサイズ分かったね……』

右手の薬指にぴったりのサイズのリングを見ながら言うと、得意げな顔をした。

「そりや毎日触ってる手だしなー。というより、大事な彼女の指輪のサイズ位、間違えるわけないだろ？」

『ありがと。これ成人式にもつけてっちょお』

「おー、そうしてそうして。そのために邪魔にならないデザインにしたんだからな」

『そうだったの？』

ごついイメージのハワイアンジュエリーなのに、貰ったものはごく繊細なデザインのもの。

これなら着る服に迷うことはないから、いつでも使っていられそうだった。

誕生日の数日後の成人式は、勝己さんが車を出してくれることになっていた。

ちょっと車高の高い車なのだけれど、着物で乗り降りしやすいようにとステップを用意してくれていた。

自宅のある父の会社の社宅前で勝己さんを待っていると、別棟の櫛の自宅のベランダに出るサッシが開く。

そこから顔を出したのは、冬休みで帰宅していた櫛だった。

「よお、蘭。馬子にも衣装だな」

『む……櫛のほうこそ着慣れないスーツなんか着ちゃって七五三かと思ったよ』

「言ってる。きっと今日は女が寄ってきて、俺歩けねえかも」

『女にだって選ぶ権利はありますよーだ』

……ほんととは見慣れない櫛のスーツ姿にどきどきしていた。

元々端正な顔つきで、細身で背も高い櫛は、スーツ姿がかなり決まっていた。

でも、それを知られちゃいけないって思ったから、あたしはわざとそんな事を言った。

「蘭、おまえなあ……そろそろ突っ張るのやめろよ？もったいないぞ？」

『大きなお世話……よ……』

不意に櫂の隣に姿を現した人影を見て、声に詰まった．．．．．

「櫂君？どうしたの？誰と話してるの？」

『ああ、幼馴染だよ』

優しい笑顔でその隣に立った人に答える。

それはミカと別れた後に付き合いだした、櫂の後輩とは違う。

あたしのまったく知らない女の人。

しかも彼女は．．．．．振袖姿だった。

櫂の優しい笑顔であたしは気付いてしまった。

その人が、今の櫂の彼女だと言うことに．．．．．。

忘れないといけない想い

あたしはその後すぐにやってきた勝己さんの車に急いで乗り込むと、その場を後にした。

勝己さんと付き合って2年以上が経つ。

なのに權の彼女を目の当たりにして……ものすごい衝撃を感じていた。

あたしの様子を見て変だと感じたのか、勝己さんが心配そうな顔で声をかけてくる。

それにもなんとなくうつろな返事しか出来ないでいた。

「おい、蘭！どうした？具合でも悪いのか？」

『え？あ、ううん、大丈夫。なんか……行くの面倒になっちゃって……憂鬱でさ』

「そうなのか？だったら無理するなよ？倒れても俺は中に入れないし……困るからな？」

『うん、分かってる』

そう答えながらも頭の中は、さっき見た二人の姿がぐるぐると回っている。

あたしは・・・・・・・・櫛を諦めたはずだったのに・・・・・・・・勝己さんとの日々を選んだはずだったのに・・・・・・・・。

心の奥底にしまいこんで鍵をかけたはずの想い。

その鍵を一瞬で壊してしまったかのように、心の奥で血を流し始めた想いに気付いてしまった。

だけど・・・・・・・・優しい人を傷つけない・・・・・・・・今のあたしの居場所を失いたくない。

そんな自分勝手な思いに、反吐が出る・・・・・・・・。

忘れなくちゃいけないんだ・・・・・・・・必死にその想いを押さえ込む。

『ねえ勝己・・・・・・・・やっぱあたし、式に行くのやだな・・・・・・・・。どっか連れてってよ』

「ん？そりゃ構わないけど・・・・・・・・いいのか？」

『うん。別に会いたいやつもないし・・・・・・・・着物着て写真撮っただけ親孝行も出来たってモンじゃない？式なんか出ても出なくてもばれないしさ』

「記念品、貰わなくていいのか？」

『いらないよ、そんなの』

「よし！じゃあ……デートしようか！」

『うん、そうしよう？』

あたし達はそのまま、進路を変更してドライブに出掛けた。

翌日はいつも通り、カフェに出勤した。

冬の間は、早朝から来るサーファーも少ないし、講習も殆どない。

カフェと、サーフショップがメインの営業だった。

輝さんは、朱音さんと一緒に春まで留守だ。

二人でハワイに滞在している。

『あー……いいなあ……ハワイかあ……』

「なんだよ、どっか行きたいのか？」

『別にそんなんじゃないけどさ、二人で何ヶ月か海外なんてちよつとだけいいなあって思っただけ』

「何ヶ月もなんてちよつと無理だけだな……しばらくならいいぞ？一緒にどこか行くか？」

『え?』

「旅行だよ……どうせ冬の間は暇だしな。いいぞ?」

『ほんとに? いいの?』

「ああ、他ならぬ蘭の頼みだからな」

『や……たぁー……!』

勝己さんの首にしがみつくと、嬉しそうに抱き締めてくれた。

「でもさ、お前パスポート持ってたっけ?」

『一応持つてるよ……まだ未使用ではあるんだけど』

「じゃあ、PC持って来いよ。ツアー申し込もう?」

『うん!』

あたしは2階に駆け上がり、モバイルPCにマウス、マウスパッドと通信機器を手にカフェへ戻る。

すばやくセットすると「現金なやつ」と言っただけ勝己さんが苦笑いする。

「で?お姫様。何処がご希望ですか?ハワイ?グアム?サイパン?それともいつそオーストラリアかカリフォルニアに行くか?」

『近くて安いところがいい。その代わり、行ける日数目一杯行きたい』

「!!」

「じゃあグアムでも行くか？そろそろ乾季に入るだろうし」

「うん!!」

あたしの顔を見て満足そうに微笑むと、ツアー会社のサイトを開く。
そして素早く目的のツアーを申し込む。

「申し込みが終わったら、閉店して買い物に行くぞ？」

「買い物？」

「お前、荷物何に入れてくんだ？」

「あ。あたしスニーカー持っていないや！」

「ほらな。やっぱり思った通りだ……」

水着や衣類は2階においてあるから困ることはないけれど、肝心のスニーカーを忘れてた！

「外貨も作ってこないとだろ？ツアー代金も払いに行かないと」

「は？もう？いったいいつからのツアーなのよ！」

「ん？来週だけど」

「はあ？」

「なんだよ、問題あんのか？」

『いやそうじゃなくて……気が早いなーと……』

「思い立ったらすぐ行っちゃわないと！」

『勝ちつてば、ほんとせつかちなんだから』

「そこも俺のいいところだろ？」

そう言って、ニツと笑った。

二人きり

旅費を支払って、外貨への両替を済ませると、あたしのキャリーバッグを購入して荷造りを始めた。

常夏の島だから、着替えは現地調達でも事足りる。

だから荷物は下着と水着、化粧品、夏によくはいているハーフ丈のジーンズにサンダルだけ。

これだったらキャリーバッグじゃなくても良かったんじゃないかと思うけれど、勝己さんが聞かなかった。

ホテルで洗濯も出来るし、ランドリー洗剤も小分けされたものが入る。

で、あたしの荷物はガラガラだった。

逆に勝己さんの荷物は、下着類やパンツ、サンダル等の外にデジカメや充電器なんかも入っていた。

それでもやっぱりガラガラで……。

『ねえ、なんでこんなにガラガラで行くん？』

「ま、帰りになれば分かるよ」

『ふーん・・・・・・・・』

何枚かずつＴシャツとお土産を買ったって、こんなに一杯になるのかなあと不思議な気持ちだった。

滞在期間は１週間を予定していて、その間に勝己さんの誕生日がやってくる。

準備が終わった後、あたしはこっそりプレゼントを自分のキャリーバッグに入れた。

「そついえば、蘭。お前さ英語大丈夫か？」

『当然でしょ？日常会話なら普通に大丈夫』

「お、頼もしいなあ。じゃ、やばくなったら頼むな」

『えー？勝己、しゃべれないの？』

「あー、片言でなら平気だけどな」

『じゃあ、トイレはどこか聞きたい場合は？』

「トイレ？トイレはトイレだろうが」

『・・・・・・・・・・・・・・・・レストルームかレディースルームだよ！だめだこりゃ・・・・・・・・・・』

「っ、通じればいいんだ！」

『そんなんじゃ通じないよ』

うん、英語はだめだって分かった……………。

地図もやばそうだな、このまま行くと。

あたしが覚えてたほうがよさそうだな……………そう思って、
1冊だけガイドブックを購入した。

旅行当日は、午前中のフライトだったから夜明け前に勝己さんの車
に乗り込んだ。

日本を離れて1週間の間、あたしは全部忘れてとにかく楽しんだ。

ショッピングは、大きなショッピングモールが近くに3つ。

お土産はABCマートで充分まかなえるし、自分たちの普段使いの
Tシャツもここで買える。

部屋で飲むドリンクも買えるし、ちょっとしたメイク道具もある。

『超便利……………。日本のコンビニより色々あるんじゃない
？』

簡易的な風邪薬や、はたまた生理用ナプキンだって売ってる。

『これが日本にあつたら……………あたし、通う……………』

「なに言っただよw単純なやつw」

食事は朝はホテル、日中はショッピングモールのフードコートかプールサイドバー、夜はあちこち美味しいと聞いたレストランに出掛けた。

その中で、日本でも行った事のあるチェーン店のレストランで、あたしはサプライズで勝己さんの誕生日を祝った。

オーバーな音楽と歌、花火の刺さった大きなアイスクリームプレートをサービスしてくれた。

昼間はプールに海に、トロリーバスで買い物にと、とにかく2人で楽しんだ。

デジカメの中の写真も、あたしも勝己さんも笑っている。

夜は自然に一緒にベッドに入って、愛を交わした。

久々の再会

『あー・・・・・・・・もうすぐ日本かぁ・・・・・・・・』

「また行けばいいだろ？」

『んー、そうなんだけどさー。しばらくグアムぼけしそっかな』

「随分気に入ったんだな」

『うん。あたしは大陸とかより島のほうが好きだし・・・・・・・・』

「そっか。じゃ、また行こうな」

『ん』

旅行から戻って、また毎朝早朝からカフェに通う。

最近は、サーファーだけでなく、海岸に遊びに来たカップルやファミリーも利用してくれるようになった。

「やっぱ女の子2人だとさー、俺らだけでやってた時より繁盛してんだなあ」と、感慨深げに輝さんが言った。

「むさくるしいのがやってるより、ぜんぜん良いに決まってるじゃない」と朱音さんが切り返す。

勝己さんはそれを聞きながら苦笑している。

それを聞きながら、あたしはオーダーの品を作っていた。

それなりに楽しく、季節が過ぎていく。

冬が過ぎて、春が来て、徐々に講習生やサーファーたちの増える季節になった。

春と秋の間は、あたしも結構忙しくなる。

カフェだけでなく、ショップの手伝いもしているからで、朱音さんと二人でんてこ舞いになる日もあった。

そんな忙しくなった夏のある日、久々の休日。

勝己さんは急用で出掛けてしまい、あたしは自宅の社宅の下で最近の相棒であるスクーターのメンテナンスをしていた。

ちょうど原付から中型の免許を取り直したところで、2人乗り出来るちよつと大型のスクーターに買い換えていた。

「よお、久々」

背後から声をかけられて振り向くと、もうすぐ21歳になる權だった。

『・・・・・・・・成人式以来じゃない？』

成人式以来、正直言っ てあたしは櫛に会わないようにしていたから。最近はおクシングに夢中らしく、盛岡の大会でも結構上位の成績を残しているようだった。

「お前手紙出しても返事は適当だしなー。メールにいたっては、殆ど返事寄越さないだろ？」

極たまに・・・・・・・・手紙が届いたこともある。

返事はいつも簡潔に、短い返事を送る程度だったし・・・・・・・・メールは数本に1度。

・・・・・・・・あたしは櫛を忘れるためにそうやってきた。

そして、それは習慣化して今に至っている。

「ちょっと俺んち来いよ。たまには話そうぜ？」

『・・・・・・・・ちょっと待ってて。ここ片付けるから・・・・・・・・』

「じゃ、終わったら勝手に上がって来いよ。部屋は変わってねえし」

『・・・・・・・・分かった』

工具を片付けた後、しばらく迷う。

でも、たまに話すくらいなら・・・と思ひ直し、櫂の部屋に向か
った。

過ち（前書き）

後半で、少女マンガ程度の描写があります。

不愉快に思われる方、18歳以下の方は戻られてください。
次話でも話が通じるように調整します。

過ち

「俺さ、留学するんだ。学校も決まって、あとは渡航手続きだけ」

『どこに?』

「サンフランシスコ。近いもんだろ?」

この秋から、期間は決めていないらしい。

『大学は?まだ残ってるんでしょ?』

「ああ、まあな。戻ってきたら復学するつもりだから」

『ふーん……でもよくおばさんが許したね』

「散々卒業したら行けって言われたぜ?」

『それが普通でしょ』

「……お前までそんなこと言うのかよー」

『彼女にでも言われた?』

「あー……いいんだよ、別に」

『……言われたんだ……』

「うつせーな。とつくに別れてるからいいんだよ」

『あ、そ……………』

「そうだ、今夜暇か？ちょっとドライブ行こうぜ？」

『やだ』

「いいじゃねえかよ。次いつ戻ってくるか分からないしさ」

『……………分かった……………』

「クラクション2回鳴らすから、そしたら降りて来いよ？」

『……………ん』

うん……………そう答えはしたけれど、少し迷っていた。

權にとっては幼馴染でしかないはずなのに。

なんでドライブになんか誘ってきたのか、考えても思い浮かばなかった。

『明日も早いから、遅くまでは行けないよ？』

「分かってるよ。心配すんな」

權の運転する車に乗り込むと、特に行き場所を決めてもないドラ

イブに出掛けた。

そのドライブで・・・・・・・・・・更に悩みを抱えるなんて考えもしなかった。

權の考えていることに、気付きもしていなかった。

『・・・・・・・・ん・・・・・・・・つ・・・・・・・・』

いつの間にかウトウトとしてしまったらしい。

車は停まっていて、あたりはシンと静まり返っている。

そして、体の上を這う熱くて柔らかいものを感じる。

『・・・・・・・・んあ・・・・・・・・』

いつの間にかたくし上げられた衣類、胸の頂点を吸われた感覚で目を開いた。

『な・・・・に・・・・・・・・？』

「蘭・・・・・・・・お前を抱きたい・・・・・・・・抱かせて・・・・・・・・？」

眠りから覚醒したばかりのはっきりしない意識のまま、体を熱くされてしまっただけなのにやら判断がつかなくなっていた。

シートはいつの間にか倒されていて、あたしの上には襦が覆いかぶさっていた。

「…………蘭……………」

唇を塞がれて力の入らない両手で抵抗しようとしても、あつけなくパンティーを剥ぎ取られる。

「……………蘭……………」

『だ…………め…………。か…………い…………やめ…………。…………』

あたしの体の中心に、熱いものが一気に押し込まれた。

行き場のなくなった気持ち

櫛があたしを部屋に呼んで、留学することを告げられたその夜。

たまには……と誘われたドライブで、まさかこんなことになるとは思わなかった。

車の中で眠気に襲われて、眠ってしまったあたしがいけなかった。

櫛は……あたしを抱いた。

あろう事が、車のシートであたしは絶頂を迎えてしまった。

ぐったりしたあたしを、櫛はホテルへ運んで更に数回に及び抱いた。

その行為が、心の奥底に蓋をした想いを剥き出しにしまった。

でも、あたしにはもうずっと一緒にいる勝己さんがいて。

あの優しい人を裏切ってしまった……そんな思いもあつて。

情性で付き合ってきたわけじゃなくて。

あたしはあたしなりに、勝己さんへの気持ちも持っていた。

櫛を想っていた頃に、辛かった気持ちに蓋をして心の奥にしまいこんでいたのに。

そうすれば、いつか穏やかな思い出に出来たはずだったのに……

荒い呼吸の櫂の下で横たわったまま、あたしは涙が止まらなかった。

「蘭……俺とするの……いやだった？」

『分からない……でもあたしは……このまま勝己さんのところにも帰れない……。顔を見れない……。』

「じゃあ、俺と一緒にいればいいじゃんか……」

『櫂は……。秋からアメリカでしよう？いつ帰ってくるのか分からないのに……。』

「待つてろよ……」

『帰国したって残ってる大学行くんでしょう？』

「そうだけど……」

『遠距離が終わると思って、また1年離れるんだよ？そんなのいつまで待てばいいの？』

「蘭……」

『帰る……。帰りたい……。』

ホテルを出ると、あたし達は無言で車に乗り込んだ。

そして無言のまま帰宅し、それからあたしは夜が明けるまで自分の部屋から出ずに過ごした。

夜が明けると、あたしは通帳と財布、カード類と……ポストンバッグに衣類をつめて家を出た。

当然かかってくる勝己さんからの電話にも出ず、メールにも返事をしなかった。

權からの電話にも……出ようとはしなかった。

ホテルばかりだと貯金も無くなってしまっし、友人の部屋だとあっさりばれてしまう。

だから住み込みでバイト出来るところを探さなくてはいけないと考えていた。

何度もかかってくる勝己さんからの電話。

耐え切れずに、あたしは電源を切った。

逃避

バイトの面接を受けるために、仕方なく携帯の電源を入れた。

確認してみた留守電に、いくつも入っていた勝己さんからのメッセージ。

「蘭、どうしたんだ？黙って店を休むなんてお前らしくないぞ？」

「おい、今どこにいるんだ？連絡をくれ……………」

「蘭、何かあったのか？頼むから連絡をくれ」

「頼むから……………声だけでも聞かせてくれ……………」

「蘭……………權から電話があったよ……………話は聞いたよ……………。信じられなかった……………」

「なあ、怒ってないから。声でもいいから……………頼むよ……………。愛してるんだ……………」

最後は搾り出すような、悲しみに満ちた声……………。

權から何があったのか聞いてしまったんだ……………。

それでも愛してると言ってくれる勝己さんの声。

あたしは携帯を握り締めたまま、涙が溢れて止まらなくなった。

あたしはどうしたらいいのかわからなかった……。

でもこのままにするわけにもいかず、勝己さんに電話をしようと思
い直す。

R R R R R R R

そこにタイミングよくかかってきたのは、櫛からの電話だった。

『 はい 』

勝手に勝己さんにばらしてしまった櫛に対して、憤りをぶちまけた
かった。

「蘭？俺 出発の日が決まったから連絡した。来週の土曜
に発つよ」

『 そう 』

「とりあえず、1年で帰ってくる。それまで待って欲しいんだ」

『 どうして勝手に勝己さんに話したの？ 』

「 どうしてって 当たり前だろ？ 」

『 何が当たり前？あたしは待つなんて答えてない！ 』

「え？おい、蘭！！ら……………」

あたしは權の呼びかけにこたえずに、そのまま携帯を切った。

かけようと思った勝己さんへの電話だったけれど、あたしはかける勇気を失ってしまった。

夜になって、部屋に好きなドラマの主題歌を使った着信音が鳴り響いた。

『……………朱音さん……………』

同じドラマにはまつた朱音さん専用の着信音だった。

『……………はい……………』

「蘭ちゃん？朱音よ？」

『はい……………』

「ねえ、今何処？ご飯、ちゃんと食べてる？」

『食べてる……………場所は……………言えないけど……………』

「どうして？勝己君……………眠れないらしくてね。それでも店は休むわけに行かないからって、毎日黙々とやってるの」

『……………ごめんなさい……………今、忙しいのに……………』

・・・』

「それはいいのよ。でもね、このままだと・・・勝己君倒れちゃうわよ?」

『ごめんなさい・・・でも・・・あたしなんか帰るわけにいかないの・・・』

「じゃあ、權君のところに行くの?」

『ううん、權のところにも行けない・・・。ごめんって・・・伝えて』

それだけ言つと、あたしはまた電源を落とした。

いない人間

面接を受けて、寮のあるバイト先にありついたのは1週間後。

新聞販売店で、朝夕刊の配達だった。

寮費に生活費、携帯代、あとは無駄遣いさえしなければ、少しの貯蓄に回せる程度の額。

それで充分だった。

明け方から出勤するのはいつものことだったし、それが少し早まったくらいなら平気だった。

バイクも乗りなれてたし、コースを覚えてしまえば楽なものだった。

あの夜から1ヶ月。

あたしは櫂の見送りには行かなかった。

結局、勝己さんにも連絡は取らなかった。

取らなかったんじゃない、取れなかった……。

このままじゃいけないのは分かっていたけれど、どうしたらいいのかわからなかった。

妊娠することはなかったし、このまま權と連絡を取らなければ・・・そのまま縁は切れてしまっただろう。

勝己さんとも・・・そうなってしまっただろう。

R R R R

久々に聞き覚えのある着信音。

『朱音さん』

「 元気? 」

『はい』

「蘭ちゃん、まだ勝己君に連絡してみる気にならない? 」

『 なんて言っているのか分からないんだもの 』

「勝己君 今も蘭ちゃんのことを待ってるわ」

『 』

「勝己君が嫌いになった? 」

『そんな事は・・・・・・・・』

「じゃあ、声だけでも聞かせてあげて？」

『でも・・・・・・・・』

「ねえ蘭ちゃん？勝己君を幸せにして上げられるのはね、蘭ちゃんだけよ？」

『・・・・・・・・・・あたし・・・・朝早いから・・・・・・・・』

『

「そう、分かったわ。とにかく考えてみて？勝己君には蘭ちゃんが必要なの。じゃあまたね」

朱音さんからの電話が切れると、あたしは俯いたまま床に座り込んだ。

『勝己さん・・・・・・・・・・・・・・・・』

櫛からの電話は、一度もなかった。

こんな優柔不断な自分が嫌いだった。

必要とされなかった学生時代の自分を思い出し、あたしは必要のない人間だという意識が強まる。

『勝己さん・・・・・・・・ごめん。あたしさえいなければ良かったのに・・・・・・・・』

いなくなつてしまいたい・・・・・・・・・・そんな思い
があたしを蝕んでいった。

あたしは・・・・・・・・・・キッチンに向かうと、そこに
あつた包丁を手にとつた。

決心

何も感じなかった。

痛みも．．．．．苦しみも．．．．．。

あたしは結果を出すことを恐れて、逃げたんだってことは分かった。

でも．．．．．何より「居なくなりたい」って意識が強くなっていた。

意識が飛ぶ寸前まで、見えていたのは腕から流れ落ちる赤いものだけ。

ごめんね．．．．．勝己さん。

ごめんね．．．．．懼。

そこであたしは、記憶が途切れた．．．．．。

目を開くと、薄暗い場所に居た。

自分の部屋じゃない。

でもその場所の匂いは、ここが病院だと気付かせた。

『逃げられなかったって事か・・・・・・・・・・』

赤い雫の流れ落ちていた腕には、白い包帯。

それを見た後、天井を見上げて今までのことを考えた。

あの夜・・・・・・・・あたしは、ちゃんと抵抗したんだろうか・・・・・・・・・・。

多分、諦めきれなかった櫛への想いに気付いてしまって、抵抗するのをやめたんじゃないだろうか。

そうなら・・・・・・・・櫛を責めるなんて出来ない。

だから、勝己さんには・・・・・・・・あたしがきちんと話さないといけないんだ・・・・・・・・。。。

このままじゃ・・・・・・・・あの優しい人を苦しめたままになるんだ・・・・・・・・。。。

勝己さんと話すってことは、あたしにとって大切なものをすべて手放す覚悟が必要で。

あの優しい人も・・・・・・・・温かい居場所も・・・・・・・・。。。

そして、けじめをつけなきゃいけない、權への気持ち。

退院したら、まずはサンフランシスコの權のところへ行こう。

そして、きちんと話して、整理をつけなくちゃ。

それで、帰ってきたら……勝己さんに会いに行こう。

何度も何度も送ってきている勝己さんの携帯メールを開く。

あれからずっと、毎日3通必ず送ってくれている。

朝起きたら、“おはよう、いい天気だぞ。今日はウインド日和だ”

昼間は“今日の俺のランチ。朱音が手抜きしやがって、こんなのしか貰えない”と写メ添付で。

夜はその日の仕事の事とか、その日あった事。

そして、どのメールも、最後には必ず同じ一言が書かれていた。

“お前を愛してる。戻ってきてくれるのを待ってるから”

退院したその日、あたしはフライト予約をした。

ホテルと航空券で、とにかく安いところ探して・・・それでも貯金はきれいさっぱり消えた。

權のPCに、フライト予定と話があることをメールした。

時差の関係ですぐには来ない權からの返事を見たのは、翌日の朝だった。

そこには“空港に迎えに行くから待ってるよ”と書かれていた。

渡米

フライト当日。

空港から、あたしは勝己さんへメールを入れた。

“サンフランシスコに行ってきます。けじめをつけて、帰ってきた話をしに行きます”

すぐに勝己さんから返事が来て、開いてみると“待ってる”と一言だけ書いてあった。

半日あまりかけて到着したサンフランシスコ国際空港。

荷物は手荷物のボストンバッグと、肩から提げた財布とパスポートなどを入れたバッグのみ。

ゲートを難なく通過して、櫓の待っているはずの待ち合わせ場所に向かった。

飛行機の中でずっと考えていた。

あたしがどうしたいのか……誰と一緒にいたいのか……

今、幸せにしたい人は誰なのか……。

それを櫂にはきちんと話さないといけない。

帰国したら、勝己さんにも話さないといけない。

「らーん!!こっちこっち!」

手を振る櫂を見つけて、そっちへ歩いていく。

「久しぶりだな」

『うん………』

にこやかな笑顔で軽くハグすると、あたしの荷物を手に歩き出した。

向かったのは、櫂が乗って来たらしい、駐車スペースにあったブルーのハーレー!。

「中古でパーツ集めてさ、自分で組み立てたんだ」

『あんだ………勉強に来たんじゃないの?』

「まあそうだけどさ、やっぱこっちでの移動手段はないとしんどいしな。でもこれのおかげで、蘭を迎えにこれたんだろ?」

『まあ………そうだけど………』

ハーレーに乗り込むと、とりあえずチェックインするためにホテル

に向かう。

予約したホテルのカウンターでチェックインを済ませると、櫛は課題を済ませたらまた来ると一度ホテルを出て行った。

あたしは部屋に入って、あとでまた来るといふ櫛を待つ間に仮眠を取るためにシャワーを浴びてベッドに入った。

櫛が再びやってきたのは、サンフランシスコの時間で深夜になってからだった。

幼かった恋への決別

かすかに携帯の着信音が聞こえた。

『ん・・・・・・・・・・』

ベッドから降りて、デスクに置いてあった携帯を手を取った。

『・・・・・・・・はい・・・・・・・・』

「蘭？俺。今ドアの前に居るから開けて？」

チェーンをかけたままドアの隙間から覗いてみると、そこには櫛が立っていた。

『・・・・・・・・・・』

無言でドアを開けると、半身になって櫛が入るように促す。

ドアを閉めると、背後から櫛が抱きしめてくる。

「蘭・・・・・・・・・・会いたかった・・・・・・・・・・」

櫛はあたしを抱きしめたまま、後ろから首筋に顔をうずめる。

「見送り・・・・・・・・来てくれなかったから・・・・・・・・もう俺なんか嫌になったのかって・・・・・・・・」

『・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・』

「もういい・・・・・・・・こっやって会いに来てくれたんだから・・・・・・・・」

『權・・・・・・・・あたし・・・・・・・・っん・・・・・・・・』

何も言わせない・・・・・・・・そんな感じの性急な口付けを受ける。

顎をつかんで振り向かせるような形での深いキス。

体から力が抜けそうになる。

でもここで流されるわけには行かなかった。

それでも權はあたしの葛藤に気付いているかのように、キスを深めて舌を絡め取り・・・・・・・・抱きしめる腕に力をこめた。

『ふっ・・・・・・・・あ・・・・・・・・』

激しくなるキスに、どんどん体の力を奪われていく。

「蘭・・・・・・・・俺を選んでくれたんだろ・・・・・・・・？」

何度も口付けを受けて、返事をする間がない。

「ガキの時からな、俺が誰よりも好きだったのはお前だけだ」

唇を合わせたまま、囁くように「お前だけを愛してる・・・・・・・・」

と言った。

『んん．．．．．』

唇をふさがれたまま、なんとか腕に力をこめて櫂を押しつけた。

『ちょ．．．．．ちょっと待って．．．．．話を．．．．．聞いて．．．．．』

「何を今更話す必要がある？お前はここに来て、今は俺といるんだぞ？あの人じゃない！俺といるんだ！」

『櫂．．．．．ごめん。そうじゃない。櫂の気持ちは嬉しい。でもね、あたしは勝己さんを傷つけてまで、櫂と一緒にいる気はない』

「蘭！」

『聞いて！あたしはね、子供の頃から櫂だけだった。でもね、櫂が他の子と付き合うのを見るたびに、少しずつ心に蓋をしたの。きちんと諦めてれば、あの人を傷つけずに．．．．．櫂とこんな風に言い合うこともなかった．．．．．』

一気に話して、一息つく。

『あたしはね、あたしなりに．．．．．勝己さんを見てるの！それに櫂だよ？あたしに勝己さんはどうだって言ったの！！』

「じゃあ、お前は俺じゃなく勝己さんのところに戻るのか？俺じゃだめだったのか？」

『……勝己さんにはちゃんと話すけど……でももう戻れるわけないよ。だけど……櫂との事は……』

「俺との事は？」

『……正直、今は考えられない……』

「蘭……」

『ごめん……』

「そんなの……信じねえよ!-!」

櫂はあたしの手を掴んで引き寄せ、抱きかかえるようにベッドに押し倒した。

すれ違った想い

『櫂！やめて！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんでだよ・・・・・・・・俺たち、ずっと一緒だったろ？これからもそうだったんじゃないのかよ！」

泣きそうな顔で、そう叫ぶ櫂を見ていて・・・・・・・・一瞬抵抗する手が止まる。

「あの人には渡せない・・・・・・・・渡さない！！」

トップスの襟元から引きちぎられて、肌が露になる。

そこに櫂が口付け、そのたびに触れたところにチクツとした痛みが走る。

『櫂やめて！』

「やめない・・・・・・・・蘭は俺だけのものだ！」

『櫂！それ以上したら・・・・・・・・あたしはもう櫂を好きでいらなくなる！』

大切だったから・・・・・・・・好きだったから・・・・・・・・嫌いになんてなりたくない。

あのままずっと一緒だったら・・・・・・・・きつとこの先もあたし達は

一緒だっただろう。

でも、あたしと櫛の道は、もう交わることはないんだ……………。

18歳の時にあたし達の道は、はっきりと分かれてしまったんだから。

「……………帰る……………」

「櫛……………ごめん……………」

櫛は返事もせずに部屋を出て行った。

あたしはただ、泣くことしか出来なかった。

夜が明けて、窓の外を眺める。

眼下の通りには、既に何台も車やバイクが走っていくのが見える。

あたしはフルーツとシリアル、ドリンクだけで簡単な朝食を済ませると、文房具やレターセットを買うために外出する。

必要なものを買ってくると、あたしは櫛に長い手紙を書いた。

子供の頃から、ずっと好きだったこと。

ミカとの揉め事や、櫛の彼女たちへの嫉妬心。

家でも学校でも居場所がなくなっていたあたしを、受け止めてくれていた櫛への想い。

そして勝己さんに告白されて、悩んだ末に付き合う事にした事。

それだけじゃなく、悩んでいる時に櫛から勝己さんを薦められた事。

明後日、日本に帰国する飛行機に乗る事。

帰ったら、勝己さんに全部話すつもりだという事。

他にもいろいろ書いた。

時々、涙かレターパッドに落ちる。

それでも、櫛にはすべてを伝えなかった。

書き終わると、あたしはタクシーで櫛の暮らしているアパートメントへ向かった。

手渡せなければ、ポストに置いてこよう・・・そう思って。

アパートメントの下には、櫛のバイクが停まっていた。

けれど、どんなに声をかけても誰も出てこなかった。

あたしは手紙をポストに入れて、ホテルへ戻った。

手紙を読んでもくれることを願いながら。

帰国

結局權には、会うことも話すことも出来なかった。

これ以上、滞在を伸ばす費用はなかったあたしは、仕方なく帰国することにした。

チェックアウトをして、ボストンバッグを抱えてホテルを出た。

ホテル前からタクシーに乗り込み、空港へ向かう。

車窓を流れるサンフランシスコの町並みを眺めながら、權のことを考えていた。

いつかは分かってもらえるのだろうか……。

そしていつかは……また幼馴染に戻るのだろうか……。
。。。。

空港についてからチェックインまで少しの間暇を潰し、チェックインが始まる少し前にカウンターの方へ歩き出した。

帰国する日時は、手紙に書いておいた。

でも会えなかったくらいだから、きつと読んでいないか．．．読んでいても来てはくれないだろう。

そう諦めて、溜息を１つつく。

チェックインが済むと、また１つ溜息をついて搭乗口へ向かって歩き出した。

あたしは気付かなかった．．．．．櫂がそつとあたしを見送ってくれていた事に。

離陸した空の上から、遠くなっていくサンフランシスコを見つめる。

涙が溢れて止まらなかった。

もう．．．櫂には会うことはないんだろうか。

自分で手放した子供の頃からの櫂への想い．．．．それを考えると切なくて仕方がなかった。

『櫂．．．．．ずっと大好きだよ．．．．。もう恋じゃないけど．．．．でも大好きだよ．．．』

誰にも聞こえないほど小さな声で、遠くなった櫂の暮らす街へ向けて呟いた。

半日かけてのフライトの末に、日本の地に降り立つとまっすぐに自分の今暮らしている部屋へ帰るために、リムジンバスの予約カウントーを探す。

『えーっと・・・・・・・・こつちって言ってたっけ・・・・・・・・』

前に海外に行ったのは、勝己さんだった。

それに空港の近くまで勝己さんの車だったし、空港内は結構不案内だった。

『あ、あつた・・・・・・・・』

やっと見つけて時間を確認する。

『うわー・・・・・・・・これなら電車で帰ったほうがいいかなあ』

一番早いバスは、ついさっき出たばかり。

次のバスまで30分は待つことになる。

何もないところで30分待つのは、正直言ってきつい。

まして半日かけての長旅から戻ったばかりだ。

「お困りですか？お嬢さん」

『え？』

聞き覚えのある声に振り返ると、そこにいたのはほっとしたかのよ

うな表情の、すっかり痩せてしまった勝己さんだった。

罪の告白

『・・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・・・』

知らせてもいないのに、何でここに勝己さんがいるのか分からなかった。

すっかり痩せてしまった姿に、胸が締め付けられる。

そんなにもあたしは、この人を苦しめてしまったんだ・・・・・・・・。

なんて声をかけていいのか分からないまま、勝己さんを見つめたその視線を逸らす。

「懼が・・・・・・・・知らせてくれた。フライトの時間・・・・・・・・」

『え？懼が？』

「ああ。お前には声をかけないで、見送ったって言うてたぞ」

『え？』

懼が見送ってくれてた事を、あたしはこの時初めて知った。

どんな思いで見送ってくれてたのか・・・・・・・・そう考えると胸が痛かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・蘭・・・・・・・・」

そつと抱きしめられた耳元で、小さく「会いたかった」と呟く声が聞こえた。

その腕を振りほどくことも出来ず、あたしはただされるがままだった。

「・・・・・・・・一緒に帰ろう？帰ってくれるだろ？」

「・・・・・・・・帰れるわけないよ・・・・・・・・」

「どうしてそう思う？」

「あたしは勝己を苦しめるから・・・・・・・・」

「・・・・・・・・こうして会ってもくれない方が、俺としては辛いけどな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「とにかく、色々話したいこともあるし。俺のところがいやなら、蘭のどこでもいい。二人になれるところに行きたい」

「・・・・・・・・分かった。じゃあ、勝己のどこに行く」

「よし、じゃあ気が変わらないうちに行こう。荷物貸して」

勝己さんはあたしのボストンバッグを手にとると、あいている方の手であたしの手を引いて歩き出した。

久しぶりにきた海岸沿いの店。

車の中では、お互いに無言だった。

「2階に上がるか？」

『店、やってるんでしょう？』

「いや、今日は休んでるよ」

『じゃあ……店でいい……』

「そっか」

あたしは、カウンターに向かって歩く勝己さんに続いて店に入る。

「アイスティーでいいか？」

『うん』

カウンターに入った勝己さんが出してくれたアイスティーを受け取ると、一口飲む。

あたしの好きなウバ茶葉のストレートティーだった。

勝己さんは自分のアイスコーヒーをカウンターに置くと、隣に腰掛けた。

「……何があったかは……櫂から聞いている。でも俺は……お前の口から聞きたい……」

『あたし……子供の頃からずっと、櫂が好きだった。それは知ってるでしょう?』

「うん……」

『櫂にとっては幼馴染だったし、彼女もいたりとかしたし……気持ちに蓋をした……』

「うん、それで?」

『勝己にはじめて会ったあの日にあんな事件があつて、学校サボつてこの海に来て……勝己に付き合ってくれて言われて。あたし、しばらく迷った……』

「うん」

『迷いながら原付の免許取って、買ったスクーターが届いた日に、櫂に言われたの……』

「なんて?」

『高木さんと付き合ってみるのもいいと思うって』

「……」

『ああ、あたしじゃやっぱりだめなんだって、その時気が付いた。ガソリン入れて……そのまま気付いたらここに来てて、ここで働くことになって……櫂とは会わなくなったの』

また一口アイステイーを口にする。

『成人式の時……櫂は女連れで。同級生はみんな……あたしは櫂と一緒にだって思ってるから行きたくなくて。あたしは勝己を選んだはずだったのに……って思ったら、その不愉快に思った気持ちに反吐が出そうだった。

それからずっと……あたしはあたしが嫌いだった。勝己を騙してる気がして……すごくいやだった』

「俺を……好きにはなれなかったって事？」

『そうじゃないよ……勝己の事、あたしはあたしなりに好きだった。でもあの日……あたしは……』

「……蘭は……何？」

『あたしは……ほんの少しの油断から……櫂に隙を見せてしまったの。あたしは……櫂に抱かれたの……』

一度じゃない……何度もイカされて……最後は抵抗もしてなかった……』

「……」

『そんなあたしが……勝己の傍にいる資格なんてない。だから……勝己から離れたの』

「じゃあ・・・櫂のところに行くのか？櫂を選ぶってことか？」

『ううん。櫂のところにも行けない。っていうより、待つつもりがないから』

「じゃあ、なんで俺を切り捨てる必要がある？」

その言葉はきつと言われるって思ってた。

そしてあたしが、それに対して納得してもらえる答えを持ち合わせ
ていないことも。

溜息

「蘭・・・俺ね、蘭がどこかで櫂を忘れられてないのは分かったよ？櫂がお前に手を出すなんて、ちょっと予想外だったけどな」

『・・・・・・・・』

「でもな、俺はそんなお前が好きで手元においてきた。櫂の事はきつと忘れて、俺を見てくれるって信じてたんだ」

『勝己・・・・・・・・』

「正直言つて戸惑った。腹も立った。でも・・・お前がいなくなった時の苦しさを思えば、そんな事はどうでもいい事なんだって思い直したんだ」

あたしをじつと見つめる今までにない真剣な目。

「帰って来いよ、蘭。俺にはお前が必要なんだよ。お前じゃなきゃだめなんだ・・・・・・・・」

『でも・・・・・・・・』

「・・・・・・・・愛してる・・・・・・・・蘭。傍にいてくれ。俺に出せるだけの力でお前を守るから。後悔もさせないから・・・・・・・・」

『勝己・・・・・・・・あたしは・・・・・・・・』

「別れるなんて言わせないぞ？前にも言っただろ？お前を手放す気はないって」

『……今日は……帰る……』

「うちまで送る」

キーを手にとると、あたしの荷物を手にして車に向かう。

どうすればいいんだろう……どうすれば一番いいんだろう……

混乱して、頭が働かなかった。

最寄り駅の近くで降りてもらって、寮に戻ると汚れ物を洗濯機に放り込む。

一応ホテルのランドリーサービスは使ったけれど、長時間バッグに仕舞っていたから洗い直したかった。

洗濯機の中の渦を見ながら、嘆息する。

帰る途中、帰ってきてからもずっと悩んでいた。

勝己さんの気持ち……權の気持ち……色々考えて。

あたしはどうしたらいいのか分からなくなっていた。

分からないといっても、あたしが自分で決めなくちゃ意味のないことで。

前は消えたいって思って、自分を痛めつけた。

でもそれは逃げでしかないから、もうそんな事はしないと決めた。

とにかく悩もう。

あたしに出来るのはそれ位だから。

帰国した翌日から、あたしはシフトに入って配達を始めた。

貯金も使い果たしたし、また一から貯めないといけなかったから。

休暇を取ってる間に、朝刊スタッフが一人事故で抜けてしまったらしく、配布区域の見直しがあつた。

部数も増えて、急いでやらないと時間内に配布出来ないかもだし、ちよつと頑張らないとって思った。

準備をとにかく急いで、1分でも早く配達を始めよう。

あたしは毎日、仕事に励んだ。

そしてその間も、勝己さんは毎日・・・1日3回メールをくれた。

權からは相変わらず音沙汰がなかった。

本能 1 (Side: 權) (前書き)

久々の更新は、權の回想から始まります。

本能 1 (Side: 權)

ちびの頃から一緒にいた、負けず嫌いの幼馴染の蘭。

中学にあがった頃から、何故か俺を避けるようになった。

原因は明白。

あいつがくれた、バレンタインのチョコレートが原因だ。

違うクラスだけどよく一緒にいる分、周りの女たちが蘭にだけは遠慮してたってのもあるけど。

なのにその一度のことが、俺達をカップルに仕立て上げた。

特に離し立てるのが、関係のない男だけで・・・女たちは逆に蘭を遠巻きに見ている感じだった。

そのまま中学に上がり、その噂は違う小学校から来ている学年半分の生徒にも知れ渡った。

うちの中学は、小学校もだったけど・・・学区と学区の間にあったために約半分の生徒が違う小学校から入学してきていた。

蘭は1年の時は割りと友人も多く、アクティブに過ごしていた。

でも2年になって担任になった先生には、何故かやけに目をつけられた。

家でも居場所がありません蘭は、担任にも恵まれず些細な事も蘭や蘭の周りのせいになされていたらしい。

クラスメイトが病死したのも、いじめが原因だったらしく……。それも蘭たちのせいにされていた。

あいつはそんな事は絶対にしないのに！

愛されることを欲しているあいつは、そんな腐ったことをするわけがないのに！

だけど、蘭はそれをきっかけに、俺とは視線も合わせようとしなくなっただけ。

どんどん孤独になっていく蘭をどうしても見過ごせなかった。

だから俺は、最後の体育祭の練習の後に声をかけた。

あいつは覚えてなかったみたいだな。

押し付けられて、応援団にされてた蘭は、衣装の学ランを同じクラス尾田に借りていた。

小柄な蘭に比べて、背も高くてがっしりした尾田の学ランは……。
・当然でっかくて。

でも何を言われても蘭を悪く言うことのなかった尾田は、蘭にとって頼みやすい相手だったんだろう……。

それが悔しかった。

「なんだ、お前。ぶかぶかじゃねえかよ。誰の学ラン、借りたんだ？」

『・・・・・・孝治のを借りた・・・・・・』

「孝治？ああ、尾田か・・・・・・。言えば俺のを貸してやったのに・・・・その方がお前にもでかすぎないだろ？」

『いいよ、もう借りてるんだから』

やっと声をかけたのに、蘭はこっちを見ることもなかった。

そしてそそくさとその場を立ち去ってしまった。

結局蘭は、尾田の学ランで体育祭の応援に出た。

急ぎでクリーニングに出して、きれいにした学ランを尾田に返している姿を見かけた。

久々に楽しそうに、笑顔で尾田に接しているのを見かけて・・・・・・イラついた。

あの笑顔は、もう俺には向けられないのかという焦燥感もあった。

やっと次に話が出来たのは、受験の時期で。

俺はこっそり蘭の受験先を聞き出した。

推薦での単願で蘭の受ける高校は、この近辺でも有名な悪名高き高

校で。

そこは滑り止めでしかみんな受けたがらない、荒れ果てた私立校だった。

本能 2 (Side: 權)

最初はそつけなかった。

でもそれは、自分といることで俺が変な目で見られないように・・・
・という配慮からだった。

それが分かって、俺は更に蘭に近付いた。

蘭は徐々にはあるけれど、俺の呼びかけに応えてくれるようになった。
った。

高校に入ってから休みのたびに呼び出して、バイトで遅くなる日はバイクで迎えに行つて、出来る限り傍にるようにした。

悠太には「付き合っちゃえばよかったのに」って言われたけど、これは恋じゃないって思い込んでた。

大事な幼馴染の蘭を、守つてやりただけだって思い込もうとしていた。

だから近所のコンビニでバイトしていた子にアプローチしてた。

蘭と同じ高校なのは知ってたけど、同じ学部だったのまでは知らなかった。

俺も男だし、付き合うとなればそれ相応の事もいたすわけで。

でもそのことで、ミカが蘭に絡むなんて思いもしなかった。

「ねえ權君。權君の幼馴染って、結城蘭だったわよね？」

「ん？そうだけど、なんでだ？」

「あたし、昨日言っちゃった。權君とセックスしたこと」

「はあ？なんであいつにそんなこと話すんだよ！」

「だって幼馴染ってだけでうるつかれるの、ウザイもの」

呆然としていると、更にミカは続けた。

「權君のがこーんな形だったって、地面に書いてやったらね、權君を傷つけたら殺すって言われちゃった！」

呆然として、何を言っているのか分からなかった。

そのあと何やらウダウダ言っていたから、頭にきて「もしもお前が蘭を傷つけることがあったら、俺もお前を殺すぞ？」と言った。

「はあ？なにそれ！權君はあたしと付き合ってるのよ？あんな子、どうだっていいじゃない！」

「どうしてもよくなんかねえよ！」

「なによ！ほんととはもううんざりなのよ！權君てばお母さんお母さんってマザコンだし！ミカより幼馴染を優先するし！どこがおかし

「いんじゃないの？」

「おかしいってなんだよ！親を大事にして悪いのか？幼馴染を大事にして悪いのか？」

「ミカは一番じゃないといやなの！大体高校生でマザコンなんて気持ち悪いし！あんなたいしたことない女の方が大事なんて認めない！」

「お前に認めてもらおうなんて思ってたねえよ！」

「じゃあ、別れて？ミカ、別に櫛君じゃなくても、ミカを一番だつて言ってくれる人いっぱいいるし。セックスも櫛君よりもっと気持ちよくしてくれる人いるし。っていうか、ミカを一番って言わない櫛君なんていない！」

ぷりぷり怒りながら、美香が出て行った。

・・・他にもいるってなんだよ。

それって、俺の他にも男がいたってことか？

なんか力が入らなかった。

好きだと思ってた女に、実は裏切られてたことも。

だけど、かわいいつて思ってたミカの女王様振りにも呆れて、見抜けなかった自分が情けなかった。

落ち込んだ俺は蘭を呼び出していた。

ひたすら甘えたくて。

抱きしめてくれる蘭の胸に顔を埋め、俺の髪を撫でる蘭の小さな手を感じていた。

次の日、蘭は停学になった。

俺のために、ミカを殴ったために。

そして、その3日後、俺がウインドサーフィンを教わるために連れて行った海で、ミカとミカの取り巻きたちに襲われた。

レイプはされてなかったけれど、拘束された上に着ていた服をむしり取られて、写真に撮られたらしかった。

俺と、俺にウインドを覚えてくれていた高木さんが駆けつけた時には、裸同然の姿のまま車から放り出されたところだった。

でも蘭は、警察を呼ぶことをしなかった。

学校でその時の写真がばら撒かれても、犯人が誰かすらも言わなかった。

でも結局は犯人のミカが学校から消えて、蘭は時々高木さんのいる海に通い始めた。

本能 3 (Side: 權)

高木さんは、最初に蘭に引き合わせた時に、一目惚れだったと言った。

俺が高校の後輩に強請られて付き合いだしたのと同じ頃、高木さんは蘭に交際を申し込んでいた。

俺もそれとなく蘭に高木さんを薦めたりした。

自分の中にある気持ちに、何も気付きもしなかった。

蘭が迷って迷って、結局高木さんの元に行くことを決めた時も、俺は何も気付かなかった。

蘭と俺の間にあったものが、その時に途切れてしまったことに。

俺は大学に進学して盛岡に引っ越して、蘭は高木さんのショップでバイトを始めた。

ボクシングを始めて、それなりに県でも記録を作った。

そしてそれなりに女との付き合いもあったし、楽しんでいた。

ハタチになって、成人式の時に年に2度しか戻らない実家に、彼女を連れて戻った。

学区は違っただけ、彼女も地元が同じだったから。

華やかな振袖で出てきた蘭を見つけて声をかけたけど、素直にきれいだって言ってやれなかった。

蘭も彼女を見て引き攣ってたし、高木さんが蘭を迎えに来ていたから……。

「まだ付き合ってたのか……。」

ぽつりと呟くと、弟の聖が「蘭のやつ、最近こっちはあんまり帰ってこねえよ?」と言った。

「兄貴、ばかだよなあ。あの女より蘭のほうが、親父もお袋も喜ぶのに」と、俺の耳元で囁く。

俺と蘭がよく一緒にいたことで、親も近所のおばちゃんたちも、将来は俺と蘭がそうなることを信じていた。

蘭に冷たい蘭の両親も、そう思っていたようで。

俺はそれを、ただ軽く受け流していた。

でも蘭があまり帰ってこないと聞いて、心の中でそれを面白くないと感じている自分には気付いていた。

帰ってこないってことは、高木さんと一緒にいるってことで。

付き合い始めてもう2年になるんだから、それ位の関係も当たり前なのにな。

自分だって色んな女と関係してるって言うのに…………。

「…………ばかばかしい……………相手は蘭だぞ？」

自分が苛立っていることが、もの凄くばかしく思えた。

大学も3年になって、そろそろ就活を始めないといけない時期に来て、俺は自分の道を考え始めた。

やりたいと思っていた仕事の勉強をしたくて、蘭からもどうしてか離れたくて…………俺はアメリカ行きを選択した。

あと1年半、大学もあるから…………親には反対された。

でも意思は変えなかった。

渡米直前、蘭に留学を伝えた。

いつ帰るか分からないしと、その夜2人でドライブに出掛けた。

幼馴染の車だからと油断したんだろ？蘭が寝込み、その寝顔を見ていたら止められなくなって…………暴走を始めた。

ただ、本能のままに…………蘭を手に入れようと抱いた。

嫌がる蘭の言葉は聞かなかった。

俺はその時点で、蘭を手に入れる権利を自分から捨てていたのに。

ただ・・・俺のしたことは、蘭だけでなく高木さんも苦しめることになった。

愛しい人 1 (Side:勝己)

櫛に初めて会ったのは、あいつが高2の冬だった。

くそ生意気なやつだと思った。

ウインドを習いたいと言ったその態度が、年上を舐めくさってるって思った。

「教えるのはいいけどな、今からのシーズンじゃきついぞ？春になったら来いよ。そうだな・・・5月位にでも」

そう言っと、分かったと一言だけ言って帰っていった。

余計に生意気で、逆に笑っちゃったけどな。

でも本当に5月になるとやってきた。

そして真剣にウインドを練習していた。

そこそこ波に乗れるようになった夏、櫛は一人の女の子を連れてきた。

幼馴染だと言った。

「おとなしそうな子だな」

「いや、あいつはただのヤンキーですから。似合いもしないのに突っ張りやがって・・・」

そういつつも、愛しそうに彼女を見つめた。

彼女と目が合った瞬間、俺は8つも年下の彼女から目が離せなくな
った。

一目惚れだったと、気付くのにそう時間はかからなかった。

「おい、權。ほんとはあの子、お前の彼女だろ？」

「蘭が？冗談でしょ。ガキの頃からの腐れ縁ですよ」

「……じゃあ、俺がもらっちゃおうかな」

「はあ？蘭のこと気に入ったんですか？趣味悪いし……」

「何言ってるんだ。充分綺麗な子じゃんか」

「ふーん、高木さん、ああゆつのが好みなんだ」

「悪いかな？」

「いや、別に悪くはないっすけど……」

「じゃあ、紹介しろよ」

「やです。面倒くせえし」

そんな事をしゃべりながらセイルに風を受けて波に乗っていた。

異変に気付いたのは、それからしばらく後で、浜に上がろうとしていたときだった。

「あれ？あいつ荷物放り出して何処行っただ？」

「どうした？」

「蘭が荷物をそのままにして、いなくなっちまって」

セイルとボードを一まとめにすると、近くを探し回った。

「一応、駐車場のほうも見てみるぞ！」

「はい！」

その時、急発進したワンボックスにぶつかりそうになる。

「んだあ？あぶねーなあ！」

その走り去った車の向こう側に、拘束されて裸体を晒している彼女を見つけた。

衣類は破かれていて、手足を縛られて。

でも写真を撮らただけで、犯人は分かっているから自分でカタをつけると言った。

その強い目の光に、やっぱりこの子を手に入れたと思った。

不謹慎だけど、彼女の体を見て……凄く綺麗だと思った。

日に焼けた肌も滑らかそうで……触れてみたいと思ったのは秘密だ。

愛しい人 2 (Side: 勝己)

「蘭ちゃん・・・・・・・・俺と付き合ってみない？」

返事を貰うまでに、2ヶ月以上かった。

多分・・・・・・・・いや間違いなく彼女は權が好きで。

気付いていないけど、気付かないから他の子と付き合えるんだろうけど、權もそうなんだと思う。

でも俺はどうしても彼女が欲しいと思った。

原付免許を取ったからと久々にやってきた彼女を、ある意味で強引に捕まえた。

春、高校を卒業した彼女を、半ば強引に俺の店のスタッフとして迎え入れた。

他のスタッフにも好評で、朝も早いのに遅れずに来るのもよかった。

その頃、なんとか彼女として傍にいてもらえるようになった。

完全に気持ちをつかめたとは思っていない。

だから時間をかけて、俺だけを見てもらえたらいいと思う。

キスは・・・・・・・・割と早いうちに奪い取った。

でもそこから先に、なかなか進めなかった。

結構、頑張って我慢したと思うよ・・・・・・・・俺も。

うちのスタッフの輝ヒカルにも朱音アカネにも、結構やいのやいの言われてたし。

輝なんか「修行僧か！勝己は！」とか言いやがった。

でも夏にはやっと、彼女のすべてを手に入れた・・・・・・・・と思ってた。

それから2年、俺にとっては順風満帆だったから。

櫂が留学すると蘭に告げた夜に、蘭を無理やり手に入れようとするまでは。

「高木さん？俺、櫂だけど」

その夜、かかってきた電話は俺を愕然とさせた。

「俺ね、蘭を抱いたよ？最初は嫌がってたけど、結局イキまくってさ・・・・・・・・今は眠ってる」

「・・・・・・・・何の冗談だ？」

「冗談なんかじゃないよ。最初は車の中でやっちゃったけど、そのあとはホテルだね。蘭もちゃんと感じてたし、最後は俺にしがみつ

いてきてさ。あっちもキュウキュウ締め付けてきて、俺のを放してくれなかったくらいだし」

啞然とした。

なんでだっと思ってた。

今更……やっぱり權がいいって言うのか？

翌日は蘭は出勤してこなかった。

メールにも返事はなく、電話をかけても出ることはなかった。

毎晩のように、いそうな場所を回って蘭を探して、少しでも寝るために酒をあおるように飲んだ。

「勝己君、蘭ちゃんとやっとな話したわよ」

朱音がやっこのことで電話に出てもらえたと言った。

「それで？居場所は分かったのか？」

「ううん……居場所は教えてもらえなかったわ……」

とりあえず、元気ではいてくれているんだ……。

俺に出来ることは「愛してる」とメッセージを残すことと、日に3度メールを送ることだけだった。

数カ月後、話したくもない權からの国際電話を受けた。

「蘭・・・さつき、こっちからの便に乗ったから。もう俺じゃだめなんだって・・・。そっちに帰るかどうかは、あんた次第だから・・・。」

「・・・何時の便だ・・・。」

「こっちを13時の便で出たから、明日の16時過ぎ・・・17時近いかな。あいつは気付いてないけど、俺こっそり見送ってきたから間違いねえよ」

「・・・。」

「高木さん・・・。」

「・・・なんだ？」

「俺、あやまんねえよ？俺だってガキの頃から蘭のこと大事にしてきたんだからな。蘭に対しての気持ちに気付くのは遅かったかも知れねえけど、それでも本気だったんだからな」

「・・・。」

「・・・蘭を・・・頼むな・・・。」

「・・・あいつが戻ってくれるなら全力で守る」

「分かった。じゃあな」

用件が終わるとさっさと切りやがった。

でもあいつは俺に蘭を頼むと言った。

だったら全力で蘭を取り戻す！

そう決めた。

1つの決心

帰国して、勝己さんに全部話して……それから毎日の日課みたいにメールが届く。

そして、必ず文末には「愛してるよ」の一言が添えられている。

あたしみたいなどっちつかずになってる女、見捨てちゃえばいいのに……と思う。

でも、求めてくれる人がいるってことに、ありがたく思う自分がいるのも分かった。

久々にかかってきた悠太からの電話で、櫛が緊急帰国したのが分かった。

大学に戻っているって事も。

卒業したら、また渡米するつもりらしい事も。

でも、櫛からは一度も連絡がなかった。

「蘭ちゃん、まだ勝己君のところに戻ってあげないつもり？」

久々に遊びに来た朱音さんに言われた一言。

『今更どうやって？』

毎日のメール、時々くれる電話の優しい声……。

正直、揺れる。

どんな理由があるうと付き合ってた相手に、こんなあたしを今でも愛してるって言われれば、揺れるのは当たり前だ。

「最近はやつと落ち着いてきたけどね、あんなに痩せちゃった時はほんと心配したんだから。蘭ちゃんに何があつたのか分かって、それでも気持ちが変わらないって……凄いのよ」

『うん……』

「せめて……顔をを見せてあげて？」

『……秋になったら……』

あんな事があつて、もう1年近く経とうとしていた。

ただ無気力に、黙々と仕事だけして。

その間、海にも出来るだけ近寄らなかった。

でも一度だけ、いつもの海とは違うところへ行つた。

そこにいるはずのない、青いセイルを探してた自分。

あたしなりに……勝己さんを今でも好きなんだって、改めて気付いた。

だから朱音さんに「顔だけでも……」って言われた時に、秋になったら……って答えてしまったんだ。

嬉しそうに笑った朱音さんの顔が、しばらく頭から離れなかった。

夏が過ぎて、煩かった蝉の鳴き声も殆ど聞こえなくなった頃。

あたしはそれまで働いてきた新聞店を辞めた。

寮に入る時に買った荷物は、とりあえず実家に送った。

母のことだから、封も空けずにそのまま部屋に置くんだろう。

そして、大きなボストンバッグに衣類や必要最低限のものを詰め込んで、バイクで海に向かった。

1つの決心を抱えて……………。

帰る場所

1年ぶりの潮の香りだった。

潮の香りなんてどこでも一緒だろうと思うかもしれないけれど、あたしにとってここは他とは違う香りだと感じてた。

そのショップの脇には、勝己さん愛用の車と、輝さんが朱音さんと一緒に乗ってくる車が少し離れて並んでいた。

海上には、講習中の青いセイルが見えた。

二人の車の間に、1年前と同じように愛用の大型スクーターを停める。

そして、カフェのドアを開けると、カウンター越しに朱音さんが顔を上げた。

『・・・・・・・・・・遅刻しました・・・・・・・・・・』

『

そう言うと、朱音さんは嬉しそうにっこり笑った。

「お帰り。早く荷物置いてきて、こっち手伝って頂戴？」

『ん・・・・・・・・』

2階に上がって荷物を置くと、あたしがいつも使っていたカフェエ

ブロンを手を取った。

きれいに洗って、いつも使ってたところに置かれていたものだ。

腰に巻きつけながら階段を下りて、カウンターへ入る。

「そろそろランチの準備するわよ?」

『今日は何?』

「Aセットは、レッドカレーとナンとサラダでしょ。あとはねえ・・・」

3種類のメニューを聞くと、すぐにあたしはレッドカレーを仕込み始めた。

シンプルにたけのこやカラーピーマン、もも肉、ぶなしめじ、アスパラなどを入れたタイ風レッドカレー。

あたしがココナツミルクを多めに作るから、割と日本人好みにアレンジ出来ていたと思う。

そして勝己さんもこれが大好きだった。

材料を炒めた後に煮込んでいる間に、ナンの生地を仕込む。

サラダは朱音さんが、グリーンサラダを手早く作って、小さい器に盛り付けるとラップして冷蔵庫に入れた。

他にもランチメニューを仕込み終わると、海岸をウインドの講習生

たちが上がってくるのが見えた。

小分けにしたナンの生地を伸ばし、何枚も焼いておく。

冷めてしまったら、また軽くあぶればいいように……。

講習生たちがシャワーを浴びて着替えると、カフェに入ってくる。

一般のお客さんも混じっていて、途端ににぎやかになっていった。

朱音さんがカウンターを出て、フロアを動き回る。

あたしはオーダーされたものを手早く作って、朱音さんに渡していた。

「蘭ちゃん……」

朱音さんの声に顔を上げると、入り口の傍で立ったままこちらをじっと見ている視線に気が付いた。

「Aセット、カウンターにお願いね？」

『はい……』

朱音さんに背中を押されて、ゆっくりカウンターへ向かって歩いてくる人を見つめた。

ちょうど正面にその人が腰掛ける。

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・ただいま・・・・・・・・』

レッドカレーのセットを目の前に出すと、ふっと笑顔を見せる。

「お帰り・・・・・・・・蘭・・・・・・・・」

そして「やっぱ蘭のレッドカレーが一番美味しい・・・・・・・・」と言って食べ始めた。

その日からあたしは、ショップの2階に転がり込んで暮らし始めた。

証（前書き）

少女マンガ程度の性表現があります。
苦手な方と18歳未満の方はお避け下さい。

証

「・・・・・・・・久しぶり・・・・・・・・」

肌の上を這う吐息と吐息の合間に、そんな呟きが漏れるのが聞こえた。

小ぶりのふくらみの先端を、暖かな滑りに包まれたのを感じ、思わず声が漏れる。

「ん・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

「蘭・・・・・・・・もうどこも行くなよ？俺のところにいろよ・・・・・・・・？」

「あん・・・・・・・・かつみ・・・・・・・・」

肌を滑るあたたかくて大きな掌・・・・・・・・。

胸元から腹部を伝い、腿の間の蕾を開く熱い舌の感触が体中に広がっていく。

「・・・・・・・・俺から離れるの・・・・・・・・もう禁止だからな・・・・・・・・」
「？」

「はあ・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「とりあえず．．．．．1年離れてたお仕置き．．．．．しないとな．．．．．」

濡れたソコにあてがわれたモノ。

「蘭．．．．．」

押し開くように熱い塊が入り込んでくる。

でもそれは、今までよりも熱くて．．．．．より一体感を感じた。

「蘭．．．．．分かるか．．．．．?」

『んあ．．．．．あついよお．．．．．』

「お前を．．．．．俺だけのもんにするから．．．．．」

腰を押さえつけて深く入り込んできて、最奥まで打ち付ける。

何度も何度も揺すられて、意識が飛びそうになる。

『うあ．．．．．あ．．．．．はあん．．．．．』

「蘭．．．．．イケよ．．．．．」

溢れてシートに流れていくのが分かるくらいに濡れたソコは、淫らかな程に水音を立てている。

「愛してるよ．．．．．」

そして、勝己さんのソレを締めつけるのと同時に、あたしの中の最奥で勝己さんが弾けるのを感じた。

それから何度か何度か体位を変えて貫かれ、体の中で熱い思いを受け取った。

眠りについたのは……何時だったのかすら分らなかった。

部屋が明るくなって、ベッドがきしんで傍らにあったぬくもりが消えた。

『……勝己……？』

目をこすりながら時計を見ると、とっくに開店準備をしているはずの時間。

階下からは、朱音さんと輝さんに弄られて苦笑している勝己さんの声が聞こえてきた。

「寝かせておけばいいわ、今日は」

「そうだな。どうせ勝己がぶっ壊しちまったんだろうし？」

「あー、なんとも言えねえのが悔しいなあ」

「……今度はしっかり捕まえとけよ？勝己」

「……ああ……」

その会話を聞いてから、シャワーを浴びようとバスルームによろけながら向かう。

『あ・・・・・・・・・・』

足を伝い流れる感触。

足元を見ると、それは昨夜の名残。

勝己さんが何もつけずに、あたしの中に入り込んでいたという証だった。

プロポーズ

「大丈夫か？」

食事を載せたプレートを手にも、勝己さんが上がってきた。

『・・・・・・・・・・』

「どした？」

シャワーを浴びてきたのに気が付いたんだろう、ニッと笑ってあたしに言った。

「俺ももう30超えましたし？それに、お前を俺だけのもんにするって言っただろ？」

『それって、こつゆう意味・・・・・・・・？』

「それも含めてだよ」

『・・・・・・・・・・』

午後からは冷やかされながら、カフェの仕事を手伝った。

講習生の中には、あたしがいることに面白くない顔をしている子もいた。

輝さんがこつそりと「勝己狙いで来てるんだ。相手にされてないけどな」と教えてくれた。

いなかった約1年の間に、そんな子も出てきてるんだなとしみじみ感じていた。

カフェを閉店して、二人で海岸を散歩しに出掛けた。

はじめは黙りこくっていた勝己さんが、おもむろに口を開いた。

「蘭。あのな？・・・・・・・・・・・・・・・・結城蘭から高木蘭になる気、ねえ？」

『え？』

「だからさ、ここに嫁に来ないかって言ってるんだよ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・ムード全然ないし・・・・・・・・』

「はは、大事なところは言葉じゃないしな。それに俺はお前と付き合い始めた時から、これだけは決めてたしさ」

『勝己・・・・・・・・』

「それに、權にも誓ったんだ。お前を全力で守るって」

『・・・・・・・・』

「だから・・・・・・・・さ。俺と結婚しよう？」

『・・・・・・・・いいの？あたしで・・・・・・・・』

「俺はお前がいいんだ。だから何も心配しないで、俺んとこ来いよ」

『・・・・・・・・うん・・・・・・・・』

「やった・・・・・・・・絶対に幸せにするから・・・・・・・・」

『うん・・・・・・・・』

「愛してる」

そつと肩を引き寄せられると同時に、唇が重なった。

結婚の話を両方の親に話してからしばらく後、パンを焼こうと仕込みをしていた時にドライイーストのにおいで気分が悪くなった。

『そついえば・・・・・・・・遅れてるかも？』

昼休み、ゴミ袋や洗剤を買いにドラッグストアに出掛けたついで、妊娠検査薬も購入した。

帰宅後にこつそりトイレでそれを使ってみる。

『・・・・・・・・・・・・・・・・陽性・・・・・・・・かあ』

ここに帰ってきた日、勝己さんはあえて何もつけずにあたしに入っ

計画的なことでもあったわけだから、喜んでくれるだろう。

シヨップを閉めたあと、2階に上がってきた勝己さんに妊娠を告げた。

『勝己……パパになるらしいよ?』

「は？・・・・・・・・出来たのか？」

◻
み
た
い
・
・
・
・
・
◻

昼に検査したスティックを勝己さんに見せた。

「や………つつたあ！でかした！」

満面の笑みであたしを抱き上げる。

「蘭、無理すんなよ？分かったな？」

「うん。分かってる」

「ああ、その前に早いとこ入籍しなくちゃな。明日、役所に行ってくるか」

翌日、婚姻届を貰ってくると、輝さんと朱音さんが保証人欄に記入してくれた。

両親に電話連絡をすると、その日のうちに届けを出した。

その日、あたしは結城蘭から高木蘭になった。

涙

23歳になった3月半ば。

久々に櫨から連絡があった。

結婚と子供が出来た事を、悠太経由で知らせたからで。

結局大学を早めに自主卒業し、サンフランシスコにまた渡っていたらしい。

今度はいつまでいるか決めてないと言った。

「蘭、幸せになれよ？」

『うん・・・・・・・・櫨も・・・・・・・・』

「高木さんによろしくな」

そう言っただけの電話。

それが・・・・・・・・・・・・・・・・櫨と最後の別れになった。

4月10日の朝。

珍しく母からの早朝の電話で目が覚めた。

同時にFAXも届いていて、床に落ちている。

「蘭？ 權君が……………」

母の言葉が遠くから聞こえるように、耳の中で響く。

FAXに目を通すが、現実のこととして受け入れられずにいた。

それはサンフランシスコから転送されて、權の実家からあたしの実家に届いた訃報だった。

あの電話の数日後、サンフランシスコからLAに向けて、課題のために写真撮影にバイクで出掛けた權。

途中、信号が変わったのを見過ごしたトラックにバイクごと巻き込まれたらしかった。

そして現場に到着した救急車にまでも轢かれた事で、治療の甲斐なく亡くなったとの事だった。

『權……………！！』

幼い頃からずっと想ってきた相手だ……………衝撃が大きかった。

いや、大きすぎた。

權が無言の帰国をして、葬儀が行われ……………あたしはずっと泣く事が出来なかった。

涙は出ても、声を上げることがまるで出来なかった。

幼馴染として悠太と一緒に参列した葬儀。

櫂のお骨を拾って、骨壺に納めて……。そこではじめてもう二度とあの笑顔には会えないんだと理解した。

あたしを愛してくれた櫂には、もう二度と会えないんだと……。

そしてやっとあたしは……。現実に心が追いついて泣くことが出来た……。

櫂が事故にあった時に身につけていた遺品の中には、たくさんの血痕のついたパスケースがあった。

そこには……。あたしの写真が入れられていた。

あたしはそのパスケースを、櫂の両親から譲り受けた。

誓い

櫂の葬儀から1年。

あたしは高木蘭になり、1児の母になった。

生まれてきた子は女の子で、海辺を散歩するのが大好きな子だった。

「まさに俺の娘ってとこだよな」と、勝己さんが笑った。

育児にはものすごく協力的で、海に出る仕事がない日は、ショップでおんぶして仕事している。

娘の名前は、海帆^{ミホ}と勝己さんがつけた。

勝己さんらしい……みんなそう言って笑っていた。

海とセイル（帆）なんて、勝己さんならではのと確かに思う。

2階の部屋の窓際には、櫂の写真が立てかけられている。

その隣には、櫂の遺品のパスケースも置いてあった。

たまに海帆が、櫂の写真を見て笑っていることがある。

「蘭、またみいが櫂を見て笑ってるぞ？ 櫂が来てるんじゃない？」と苦笑する。

『ぶっ……来てたら怖いわけ?』

「そうじゃないけどさ……お前たちを見守ってるんだろっし」
不幸になんかしたら……俺絶対に呪われるな……
そう呟いた。

本当のことを言えば、多分間違いなく櫂はここにいる。

幽霊……とかじゃなくって、櫂の心がここにいるんだと思う。

あたしや海帆を見守ってくれてるんだろう。

何故なら、あたしの夢には頻繁に櫂が出てくる。

あたしが幸せかどうか確かめに来るように。

そして、幸せだと笑顔を見せてくれ、喧嘩したりして落ち込んでい
ると悲しそうな顔をする。

声は決して発してくれない。

『櫂……あんたの声、忘れちゃいそうだよ……心の
中でそう思う。』

でも、多分あたしは生涯、櫂を忘れることはないんだろう。

大切な幼馴染として……長い間、恋した人として……
あたしを愛してくれた人として……。

海帆を抱いて海岸に出る勝己さんの後をついて行き、そこに広がる海と空の境目を見つめる。

その海岸線の向こうに、彼の姿が見えるような気がして。

愛してくれてありがとう・・・・・・・・・・櫂・・・・・・・・。。

誰にも聞こえないくらいに小さな声で呟いた。

大事にしていくよ、あたしの今の幸せを。

櫂と過ごした時間と同じように、大切に愛していくよ。

「お前はきつと、あいつのことは一生忘れられないんだろうなあ」

そんな勝己の声に振り向くと、海帆を抱いて笑っている勝己さんの優しい瞳に出会う。

「それでも、俺はそんなお前が大事だから。俺たちなりに幸せになればいいんだから」

『勝己・・・・・・・・・・』

「幸せになろうな？」

『うん。今でも充分幸せだよ？』

「じゃ、もっと幸せになろう・・・・・・・・・・」

『うん』

櫂の分まで、あたし達は幸せになるよ……。

海岸線にまた目を向けて、その向こうにいるだろう櫂にもう一度・
・幸せになると誓った。

誓い（後書き）

拙い話を長々と読んでくださってありがとうございます。

全開の更新から1ヶ月近く開いてしまいましたが、今回で一応完結です。

評価・お気に入りに入れてくださってありがとうございます。

また近いうちに、新しいお話をUP出来るように頑張りますので、よろしく御願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0403n/>

I don ' t forget you

2011年9月3日11時44分発行